

## 変身

一

歌が聞こえていた。

悪意が世界を覆うとき  
必ず彼は現れる  
嵐すそに裾をはためかせ  
握る拳つかに未来を掴む  
憎き敵には裁きの雷  
唸うなれ電気死チョッパ  
闇の企み絶やすまで……

汪凱威ワンガイウエイはその続きを知っていた。「煌めけパンタグラフィック」だ。他の部分に関しては記憶が定かでないが、サビであるそのフレーズと節とが、淡い記憶の中にある。子供の時分、友人宅で密かに見せてもらっていた変身ヒーロー番組、『叛它龍パンタロン』の主題歌だ。

秀才として親族と郷里からの期待を受け、それを矜持きやうじともして育った汪ワンにとって、『叛它龍パンタロン』は公然と見ることを許されない番組だった。子供向け番組ということばかりではない。反体制思想を含むコンテンツとして国家から警戒視されていたがゆえに、アングラにファンダムの中枢が存在した暗黒時代でもあった。だから、在郷名士の不肖の息子に勉学指導するという建前のもと、家族と地域社会の目をかいくぐって楽しんだのだ。当時の汪ワンの、数少ない息抜きのひとつであった。

歌は最初に戻って繰り返される。そして同じところで詰まった。

「煌めけ、だ。フィー」

フィー。フェリクス・セラフィモフ。歌っているのは彼だった。外見に負けず劣らず、少女のような歌声は、テレビ放送で耳なに馴染んだハリのある中年男性のものと、だいぶ異なる。しかし、それはそれで良かった。間奏ののち、フィーは二番らしきものを歌いはじめる。不器用ながら懸命に、聴衆の笑顔のために。こんな夢ならしばらく見ていたい。

自分は眠っているのだと、汪凱威ワンガイウエイは自覚した。現実にはフィーとはぐれてしまった。ウルゼル・ヘッセとも。そしてカスパル・シュミットは時空の彼方へ消えた。いまごろどこへ放り出されているか知れない。先日モスクワ上空に放り出された汪ワンは、フィーの駆るノイエトーターに助けられたのでよかった。カスパルが運に見放されていないことを祈るのみだった。

汪ワンはフィーに呼びかけようと試みた。しかし聴衆の歓声ワンが汪ワンの声をかき消した。やがて人だかりがフィーの姿を覆い隠し、ステージの幕が下りる。

どこからともなく響くブザーの音。

まただ。そう思ったときには目が覚めていた。アパートの一室に据えられたソファ。そこに座りながらうたた寝をしてしまったらしい。どこか他の部屋から、ラジオらしき音が聞こえてきており、どうやら歌を流しているようだった。しかし、これだけノイズが強くては、たとえ知った曲だとしても判別できまいと汪は思った。そんな雑音よりも、いま夢で聞いたフィーの歌声のほうが、よほど強く<sup>じだ</sup>耳朶を震わせるようだった。

「大丈夫か、汪大尉。うなされていたぞ」

ソファの隣で汪の肩を支えてくれているのは、カネジュ・イルベチェフの<sup>たくま</sup>逞しい<sup>たいく</sup>体躯だった。よだれを<sup>ふ</sup>拭け、というイルベチェフのジェスチャー。汪は背筋を伸ばし、その動作により江藤博照の脳で生じたであろう快感を、己が享受できることに密かに驚嘆を覚えつつ、ハンカチを多数のポケットの中から苦勞して探し出し、居住まいを整える。

「私の本当の体は、オルロフに塗り込められている。そちらの体の負担が、影響しているのかもしれないな。とにかく窮屈な気分だ。しかし、問題ない。私は適応してみせよう」

「了解。無理をしていないのは、なんとなく伝わった」

イルベチェフは<sup>つか</sup>束の間、こめかみを押さえて顔をしかめたが、すぐに心得たふうでうなずく。そしてソファから立ち上がり、閉ざされた部屋のドアに向かってやや声を張り上げた。

「ダーリヤ、いい加減にしてくれないか。こっちは急いでいるんだ」

「待っちゃりや！ 大事を為そうとするもんが、手順を誤ったらいかんちゃ。あと少し。今、最後がジッパーを……やりゆうき……」

アパートの名義人、ダーリヤが、どたばたと家具や床に体をぶつけているのがわかる。汪は腕時計を確かめた。彼女が着替えをするからと言って二人をリビングから締め出したのは、かれこれ二十分ほど前になる。

ダーリヤについて、イルベチェフがモスクワ駐在だった頃の馴染みだという以上のことを、汪はまだ聞かされていない。いや、何から聞こうかと思案しているうちに、意識が飛んでしまったのだった。戦火の及ぶモスクワ市中で、不審な男を伴っての急な<sup>おどな</sup>訪いに応じてくれるのだから、親密には違いないのだろう。そう推し量るのみである。

「同じ連邦軍人だ」イルベチェフが自ら説明を始めた。「昨年七月、このモスクワが陥落したときのこと。彼女とその仲間たちは市民に溶け込み、レジスタンスとなった。俺が先日から市中に潜伏できていたのは、彼女たちの協力あってのことだった。もちろん、本当の一般市民や<sup>オフェンバーレナ</sup>啓示軍に知られていいことではない。だから少し情報開示を遅らせてもらった。なにせ、貴官の思考は、ときどき周りの人間の脳裏に直接伝わってくるのでね」

「それは私とて困っているのだ。おかげで、正真正銘の江藤博照を演じることで貴官をうまく利用しようという作戦が、早々に頓挫したのだからね。——いったいどの程度、伝わっているのかな？」

汪に問われ、イルベチェフは神経を集中しようというように目を閉じた。

「フムン。一言では言い表しにくい……。波がある。しかし最大の場合でも、貴官の内心がエッセイでも読むように細微に書き下されてくるわけではない」

それはそうだろう、と汪は思った。そもそも人の思考など、直列的に整理されているわけではない。文章というプロトコルに落とす際に、そのように変換出力したというだけのことだ。語彙の選択については言うまでもない。思考を示すのに文章が必ずしも最適な表現方法とは限らないから、人はときに図表も交えて論理を書き顯す。プレゼンテーションであればジェスチャや声の抑揚も入る。伝えたいものが心の動きであれば、絵画や音楽、舞踊がこれに当たろう。

「貴官はなにか違和感を覚えたようだな。だが、その内容は今、俺にはわからない。表情を見て感情を押し量るのに似た、曖昧な感覚が惹起されたのみだ」そこで、イルベチェフは目を開けた。「やはり、そんな顔をしている」

汪はエトガル・ローゼンの言葉を思い出す。感情の昂ぶった際に、心の声が伝わりやすかったと。エトガルはさらに詳細な分析を行っていたに違いないが、江藤に昏倒させられたまま、目を覚ましていない。今はイルベチェフのツテのある病院に預けてある。よって、汪は自ら実験データを積み上げることにした。

——急げ、ダーリヤ。これは私の命のかかった問題だ！

手応えは、ない。着信を確認できないのはこのシステムの悪いところである。そして待つこと一分。ドアが勢いよく開け放たれた。

「見るがえい！ バットウゲザ！」

『叛它龍』の有名キャラクター、コウモリ型改造人間に扮したダーリヤが、飛膜を大きく広げたポーズで、牙の垣間見える唇に不敵な笑みを浮かべている。その背後には白いもくもくとした煙……ではない、湯気が立ち込めており、ドアからゆっくりと侵入してくる。腸詰と玉ねぎ、そしてコンソメの香り。

嗅覚が刺激され、腹が雑巾のように絞られる感覚に襲われた。これまでの数日がそうであったように、汪凱威の意識は、江藤博照の肉体の生理的欲求に対してつぶさに反応している。

「その様子じゃ、腹ごしらえはまだやったようだね。何を急いじゅーかは知らんが、今は夕飯時ちや。まずは食べようやいか」

ダーリヤが、腕についた飛膜を巧みに捌きつつ、温かい食事を手際よくテーブルに配膳した。胃袋の要求——宿主のものだが——に従って、汪はおとなしく席につき、即座に器を手にとった。うまい。イルベチェフも日本流の食前の祈りを捧げ、パンとスープを頬張る。

と、部屋の隅から近寄る毛むくじゃらの姿があった。汪が身構えるより早く、ダーリヤが何かをそちらへ放る。パンだ。見事に空中で獲物をキャッチしたその獣は、前足を器用に使ってそれを抑え込み、すらりと形よくのびた吻を大きく開いて貪りはじめた。

汪はその生き物に見覚えがあった。数日前の夜、公園で汪らの食事をネコババした野犬。

「こいつは驚いた！」イルベチェフが叫ぶ。「ゴン太殿か。まさかダーリヤのところで居候していようとは」

「何日か前、腹を壊いてふらついちゅーのを見つけて連れてきたんや。なにか悪いものでも食うたんやないかね。それから仲良うしちゅーし、調子もえい。——知っちゅーのかい？」

ダーリヤが、次の腸詰をいつ放ろうかタイミングを伺いながら、イルベチェフに問う。

「ああ、知っているとも。聞いて驚け、こちらの江藤少佐が飼っておられる狼さ。主人が囚われの身の間、こうして兵站を確保していたのだな。立派、立派」

「そ、そうだ。私のペットだ。こちらで厄介になっていたとはな……。感謝する」

汪は慌てて調子を合わせたが、パンにかかりきりのゴン太が、汪を振り向く様子はない。暖炉の谷の一件以来、江藤博照の来歴や身辺について調べ上げていた汪ではあるが、ゴン太のことは不明点が多い。というか、忘れていた。しかし確かに、暖炉の谷にも帯同していたという話はある、酔狂なものだと首を傾げたことは今思い出した。かくも、よくわからないメンタリティの男から体を預けられてしまった不幸を、改めて汪は嘆く。

汪の心配を他所に、ダーリヤは腸詰を留保したままイルベチェフのほうへ向き直った。

「あんたの任務は市内の偵察と連絡確保や思うちょっとだが、捕虜救出も掛け持ちしちよったのかい？」

「いや、いや。これは乗りかかった船、いや、瓢箪から駒、もとい、この奇貨居くべしといったところだ。江藤少佐は北熊でも重要なパートナーとして位置づけている御仁なのだ。君たちにも悪い話ではないはずだ」

「ふうん」ダーリヤは汪を一瞥し、またイルベチェフを睨む。「モスクワに残ったうちらは、外廓聯も黒龍隊も知らんけどさ、北熊にとっちゃ取引材料になるってカネジュの魂胆は、わかるぜよ。ほんじゃあきに、モスクワから出ていく啓示軍を味方にも悟られんようこっそり追いかけようやらあて、酔狂な話にも協力するがよ。——おかわり、要るかい？」

汪は迷わず、空になった椀を差し出した。江藤博照の巨体を維持し、そのポテンシャルを引き出すには、相応の物質的インプットが必要だとわかっていた。

ダーリヤは椀にスープをついでやると、ゴン太用にちぎった腸詰を放ってから、残る半分を自らがかじる。数回咀嚼してから、にやりと笑った。

「赤の広場で連合軍の先鋒とやりおうたがは、第五機兵戦隊とノイエーター二号機。啓示軍の符号で言うたら、E5とX2だ。連合軍は赤の広場を制圧したけど、敵は取り逃がしちゅう。——実は、仲間からのそがな情報が入ちゅう。機兵に乗ちよった一団じゃちことなら、まず誰か見ゆるうき、さっき使いを出いちよいた。ちょいと足を伸ばすことになるき、しっかり食うちよきなよ」

足、と言われてついつい汪は、ダーリヤのすらりとした脚線——仮装の一環で黒いタイツになっている——をまじまじと見てしまう。

「上出来だ、ダーリヤ」イルベチェフが大きな声を出した。「ついでで悪いが、もうひとつ。その赤の広場で擱座したゾルダートを探してくれないか。ベースはトロイパペゾルダートだと思うが、外装が“人形”、ノイエーターに似ているやつだ。色は白にすみれ色のアクセント」

ヴィオレットヴィカール、VVの存在は、イルベチェフが汪に協力する動機のなかで相応のウェイトを占めている。イルベチェフ自身がそう語り、汪もそれは本音だと思っている。エトガルと汪が揃っただけで、あの機体の機能を再現できるわけではない。ヤナ・シュプリンゲル率いる多くの技術者たちがいてこそ“雲”は実現した。亜細亜連邦の、さらには北熊という限られたグループのリソースだけでコピーを作るのは、不可能ではないが、大仕事になる。手間取っているうちに戦局が変われば、その戦略的価値も失われかねない。イルベチェフはゲームのルールが変わる

前にカードを切るべく、すでに存在しているVV<sup>ヴィヴィ</sup>を手に入れたがっている。

「そがなシャレた出で立ちなら、前に見たら覚えちゅー思うけど、あいにく縁がなかったようやわ。やけど、任しちよき。集会に来ちゅー連中には現場に張っちゃったモンもおるし、たとえ見ちゃらんでも、探らしたらええ。うちが言うたら、仲間は動いてくれる」

「仲間やら、集会というのは？」

「仲間は仲間、集会は集会や」

コウモリ女が牙を覗かせて哄笑する。

## 二

『叛它龍』のキャラクターのなかで、汪凱威<sup>ワンガイウェイ</sup>が最も好んでいるのは、テンガロンである。悪の組織の幹部で、有翼の、誇り高い戦士。毎回、人の心情を巧みに突いて戦いを優位に運ぶ戦術家で、組織内の派閥闘争にも長けている。手下を使う場面では、指揮官として力不足のシーンも多々あるのだが、矜持に基づく己のポリシーを、愚昧<sup>ぐまい</sup>な下級戦闘員たちにまで浸透させようという気概が一貫して演出されていたのが逆<sup>ワン</sup>に好ましい。あとは知恵があれば申し分ないキャラクターとして評価されそうなのだが、それは汪個人にとって不満ではなかった。知恵なら汪は不自由していなかった。自分が望みつつも手中に収めきれしていない、そんな彼の生き様がすばらしかったのだ。

――で、あるにも拘わらず。

夜霧に包まれた街路を練り歩く汪<sup>ワン</sup>は不満たらたらである。

この黒く太い腕、胸板を強調するような鎧、そして不格好な槍と盾。

「やはり納得がいかないな。どうして私が、よりもよって、ゴリラトッゲザなのだ」

先頭をゆくバットッゲザ：ダーリヤが首だけ小さくふりかえって笑う。

「だって、その体格。それしか合う衣装がなかったやないが」

「石礫<sup>いしつぶて</sup>を受けて負けるのだぞ。ろくに分析もせず、パンタロンを非力と過小評価して。――私とは似ても似つかない」

「まあまあ、江藤少佐。なにも仮装大賞というわけではなく、仮装パーティーなのでですから」

なだめに入るイルベチェフが扮するは、ヤモリトッゲザ。パンタロンとの戦いでまあまあ善戦したし、あとで強化されて――色と武器だけが違って――再登場する展開もあった。おまけに玩具も後発品のためか品質が安定していたので、ファンの人気は並以上とあってよい。

そのヤモリトッゲザが、ウルフトッゲザ：ゴン太をリードで繋いで最後尾を歩いている。こちらは、もともとの首輪に加えて、冠ひとつをかぶらせただけであるが、実はこの一行の中でもっとも原作再現度が高い。ウルフトッゲザは低予算でやりくりされていたシーズンの登場キャラクターであり、アクターは大柄の雑種犬だった。変身シーンもなく、常にイヌ科動物の姿で、人間の声をアテレコされていた。リアルタイム視聴の少年少女は失望したに違いないが、再放送組やリバイバル版からの参入組にはかえって人気がある。実際、ダーリヤの部屋を発ってからここまで、すでに四回、ゴン太のコスプレを褒めそやす人があった。

ダーリヤのバットッゲザは、テンガロンの配下にあたる、いわば下っ端<sup>かたき</sup>の敵役ではあるが、まだ

駆け出しの頃のパンタロンにとっては十分な強敵だった。それに原作第一作からして複数体が登場するうえに、リバイバル版でも欠かさず出演するので、知名度では群を抜く。やはり汪のゴリラトッゲザがいちばん見劣りしているように、彼自身には感じられた。しかし、江藤博照の肉体である以上、テンガロンにしてくれと言い張ることもできなかった。それはテンガロンのイメージを壊す行為であり、是認できない。

——そのような不埒な思いを抱いても、なお、江藤博照の精神は顕れない。

江藤はヴィオレットヴィカールやオルロフの機能を使って、時空回廊を開通させた。そう断定するには情報不足だが、少なくとも、その可能性があると汪は考えざるをえない。これはすなわち、脅威である。

「少佐。難しいことは、なしにしましょう。パーティーです、楽しまないと」

イルベチェフがそう言ったのは、仮装のことではなく、江藤への危惧のことだと汪は察した。またもオルロフの力で思考が伝播しつつあるようだった。特定の題目について集中して思考するのは、どうやら危うい。どうしても何か考えてしまうにしても、もう少し、秘匿性の低い事柄を対象にするべきだった。

歩を進めながら、周囲を見渡す。

時刻は午後九時を回った。市街戦のさなかでもあり、街灯も商店の灯りも数少ない。

しかし、『叛它龍』愛好家たちの仮装行進の周囲だけは、色とりどりの光り物によって照らされていた。姿まではわからずとも、おぼろな光が前後に連なっていることから、その規模が推し量れる。二百人は下らない。皆、お祭り気分である。とても夕刻まで砲火にさらされていたとは思えない。

今も上空をときおり、連合軍のものらしき航空機が飛んでいく。バロッグが上空まできれいに晴れている証拠に、それらの多くは旅客機とあまり姿の変わらない大型機である。爆撃機も交じっているかもしれない。Su-44の機関砲掃射の比ではない甚大な被害がこの街にもたらされるさまを汪は想像した。ありえないことではない。バロッグに乗じつつも、市中に数多の市民が残っていると知ったうえで、連合軍は戦端を開いたのだ。制空権を確保した時点でモスクワを焼き払うということも、じゅうぶんに考えられる。それでも市民たちがこうしたイベントを楽しんでいるのは、連合軍に対する不服従の表れだろうと汪は感じた。すなわち、非暴力的なある種のレジスタンスなのだ。連合軍は機兵や突撃部隊を押し立てて、啓示軍戦力を市中心部から追い出した。しかし次の段、市中への進駐は困難を極めるだろう。

「諸刃の剣だ……。もしも金星也元帥がこの光景について報告を受けたら、即座にガスか戦術核攻撃の指示を出すかもしれない。たとえ同盟国の信用を失おうと、味方の先鋒もろともだろうとも、あの総司令はためらわない」

汪はどうせ漏れそうなその思いを、誰に向けてとも無く、口に出す。身震いする思いだが、江藤の体はそれには反応しない。勇敢なゴリラのごとき足取りはまったくふらつかない。

「怖いことを」ダーリヤが眉をひそめる。「そやったら、今からでもシェルターに向こうたら？ どうせ地下鉄に乗るんや。途中まで、道は一緒やき」

「そのつもりはない。私にはやるべきことがある。それよりも、いま気になったが、地下鉄は動いているのか？」

「この翼でひとつ飛びして見てくる？ 誰だって地下鉄は破壊したくない。まあ、核で街ごと焼き払うっていうなら、どうかわからんけどな。そがに金星<sup>キムソンヤ</sup>也は小心者かね？」

「脅威を正しく認識できる御仁だ。私はよく知っている」

「それは俺も同感だ」と、イルベチェフ。「だから、もう少し急いだほうがいいだろう」

「大事の前の小事ってわけ？ 都市として中央議会の議員選出枠を持つこのモスクワですら、尻尾切り<sup>しっぽ</sup>の対象やなんて、そがな連中に全権を任せちゃってえいもんかね、まったく。どうなが、カネジュ」

「無論、北<sup>セヴェルメドヴェーチ</sup>熊<sup>たの</sup>としては全力で阻止する。今は同志を待んで自分の任務に集中するまでだ。ダーリヤ、この仮装、脱いじゃだめなのか？」

「却下。この先のイベント会場で、うちの仲間と落ち合うための目印、身分証明みたいなもんだきね」

「仲間ってそういう連中か」

汪<sup>ワン</sup>の呟<sup>つぶや</sup>きにふたりから無言のクレームが入る。レジスタンス、とふたりには聞こえたのかもしれない。

しかし、彼らの視線はすぐに他所へ向けられることになった。ひときわ大きなジェット音が近づいてくる。

伏せる、散れといった掛け声があちこちで上がる。しかし汪<sup>ワン</sup>はそれがミサイル攻撃ではありえないと悟っていた。変則領域で使える高価なミサイルは稀少で、確かにまだどこかで温存されているはずだが、今ここは使うべき場面ではない。特別運用調整官としての条件反射でそれがわかる。

――ならば、何か。亜連軍の擁する変則領域対応機、Su-42 や Su-44 とはエンジン音が異なる。

夜空を見上げた汪<sup>ワン</sup>は、鈍色の巨大な悪魔が二体、絵から抜け出すように出現するのを目撃した。左右に広げた大きな翼を畳みながら、地上へ降りて来る。

「バードデーモンか！」

米軍の擁<sup>よう</sup>する空挺機兵<sup>くうてい</sup>、GS-400。愛称バードデーモン。汪<sup>ワン</sup>も直に目にするのは初めてである。

汪<sup>ワン</sup>の叫びが伝わったか、周囲もその存在に気づく。耳をつんざくばかりに高まっていたジェットエンジンの音が不意に収束し、かわって、バードデーモンの脚のあたりが発光する。ロケットエンジン噴射により対地速度<sup>げんさい</sup>を減殺しているのだった。

大通りに二体のバードデーモンが着地する。その名の通り、人よりも悪魔的なシルエットのその機体は、前方に張り出した機首の威圧感のためか、龍<sup>ロン</sup>やアントゼルトゾルダートよりも大きく感じられる。そしてその手には、機兵サイズの拳銃が握られている。汪<sup>ワン</sup>の記憶が正しければ、これは二〇ミリ機関砲である。歩兵や非装甲・軽装甲のトラックを掃討するにはもってこいの代物。汪<sup>ワン</sup>たちは咄嗟<sup>とっさ</sup>に、路肩駐車されていたトラックの陰に身を隠したが、それで遮られるのはパイロットの視線と、二次、三次的な破片くらいのものだろう。

「いったい何をしに来たんだ」と、イルベチェフ。「米国防総省<sup>ベントゴ</sup>の情報分析はその程度なのか？」

「どういう意味だ、イルベチェフ大尉？」

「それはつまり……。ああいうことだ」

イルベチェフが指し示す先に、ロケットランチャーを肩に担ぎ出した人影がある。仮装姿だが、得物<sup>えもの</sup>は汪<sup>ワン</sup>と違って本物らしい。ひとりではない。三、四人。たまさか持ち合わせたにしては都合が良すぎる。

「ダーリヤ、あれも仲間なのか」

「同好会であんなみっともない仮装をするモンは知らんね。ただの兵役経験者かもしれん。啓示軍は潮が引くようにここいらから撤退していったき、物資はあちこちに残されちゅうみたいちゃ」

「武器弾薬も例外ではない、と？」

汪は疑念を持った。エトガルは、そもそも啓示軍がモスクワからの戦略的撤退を当初の方針としていたと語っていた。もちろん、戦略が末端の兵士まで伝わっていたとは限らないので、ダーリヤの言うように、慌てて武器弾薬を捨てて逃げ出したのかもしれない。しかし汪はどうしても、別の可能性のほうに気を取られる。

——敢えて、武器弾薬を残した。連合軍に参加する米軍が市中に入ることを想定したうえで、モスクワ市民がそれらの武器弾薬を利用して、部外者の侵略に反抗できるように。啓示軍の快進撃をなんとか押し留めようと、やむなく協調路線を取った亜連軍と米軍だが、歴史を緋けば、亜連軍は米軍を最大の仮想敵として組織されたものだ。正規軍崩れのレジスタンスはもちろん、大半の市民もその経緯を十分に理解している。

バードデーモンに対するシュプレヒコールが上がる。ここは俺たちの街だ、武装を解除しろ、アメリカコースは出て行け、云々。いきなりロケット弾を放たなかっただけ理性的だったと、汪はひとまず胸を撫で下ろす。バードデーモンは手にした二〇ミリ機関砲の砲口を、まだ市民たちには向けていない。おそらく通信で判断を仰いでいるのだろう。

ダーリヤは舌打ちをすると、翼を翻し、走り出した。

「どこへ行くんだ!？」

「ちくちく手入れが必要になったのさ! そこらへんに身を隠してな!」

その尻を追いかけたほうがよいと汪は感じたが、ウルフトゥゲザが言うことを聞かなかった。汪の着ぐるみの裾を噛み、イルベチェフの持つリードをぐいぐい引っ張って、ビルの合間に退避しようとしている。思いのほか強いその力に、慣れない仮装姿のふたりは、従うしかなかった。

物陰に入ったところでゴン太は落ち着き、もつれるように走らされていたふたりも息をついた。しかし、安心も束の間のことだった。仮装行列からバードデーモンへの投石が始まったのだ。

ひとつ、またひとつ。すぐに、数など数えていられなくなる。石礫はいくらでもあるのだ。他ならぬ連合軍が砲撃や機兵の突入で破壊した、ビルや舗装道路の成れの果てである。その事実のみをもってしても、反抗の動機として成立するだろう。彼らはここで満足に暮らしていたのだ。それが地下鉄駅の砂時計、あるいはオルロフの軛のなせる業であったとしても、無自覚の彼らには関係のない話だ。

「イルベチェフ大尉。私は当初、煽情的な理想の提示と闘争態勢こそが、啓示軍の結束の要であると考えていた。しかし、それは誤りだった」

「こんなときに何の話だ、汪大尉」

「今だからこそ、話す必要がある。啓示軍の支配下にある市民たちは、闘争本能や生存本能を肥大化させられていたのではまったく無い。心底、支配の状態に安らぎを得ていたのだ。亜細亜連邦という巨大で強権的な統治機構の下にあるときよりも、ずっと。ハンス・ライルスキーの掲げる理想やアルベルト・ヴェーバーの語る道筋に希望を抱き、苦難に向かって扶けあえる仲間がいる……」



そんな生活を守りたいという気持ちが、稀有なまでの紐帯けう ちゆうたいを形作っている。これはすでに完成され固定化された結束だ。信頼主義社会とでもいうべきか」

「そんなお人好しで社会が成立するものか？ 泥棒もんびに門扉を開けてお茶まで出すのでは、早晚、滅んでしまうだろう」

「そのイデオロギーは、今は奇異に感じられるかもしれないが、しかし欧米を世界の列強たらしめた資本主義とて当初は異端であり、革命的だったのだ。もしも、そのシステムを過去にタイムスリップして説明する機会を得られたとして、果たして何人が説法に成功できるだろう。信頼主義が今日この日に置かれている状況も同じだ。亜細亜連邦やアメリカ合衆国、その他いまだ啓示軍オフエンバーレナの進駐を経ていない地域の者たちには、この信頼に立脚する喜びと、将来への明るい展望とが、共有できない。しかし、この壁は活性化エネルギーのようなもので、いったん乗り越えてしまえば、あとはあるべき準位に自然と流れていくだろう。誰にもそれは止められない。そしていつの日か、信頼主義社会の存立は、あたかも自明のことと扱われるようになる。コロンブスの卵と同じだ。先の割れた卵を見ていない者たちと、見たことのある者たちでは、当たり前という概念が異なるのだ」

「そうまくしたてられても、理解が追いつかない。観念の話は、今は結構だ。ひとまず目の前の実利的な話をしよう」

「実利、大いに結構だ。たとえ啓示軍オフエンバーレナのすべてがモスクワを離れたとしても、市民の多くは、連合軍を笑顔で迎えない。ゴリアテに立ち向かうダビデのように、戦力の差は意思決定を阻害しない。たとえ抵抗の結果、己が血肉で贖あがなうことになろうとも、彼らが『正気に戻る』望みは薄い。――だから、カネジュ・イルベチェフ、君は果たすべき任務の遂行に、戸惑いを覚えていたのだろうか？」

数秒の間において、イルベチェフが胸にためていた息を吐き出す。

「やれやれ、心を読まれているのはこちらのほうか？ たしかに、そうだ。俺はモスクワ突入に先駆けて市中に潜入し、レジスタンスとも連絡を取って、連合軍の攻撃を内側から手引きする役割を負っていた。そして、クレムリンの解放のため、いの一番で突入するのは、我が北熊セヴェルメドヴェーチの精鋭部隊であるはずだった。北熊セヴェルメドヴェーチがクレムリンに対して長年抱いてきたコンプレックスの解消のために、それは必要な儀式だとみなされていたのさ」

「しかし、それは果たされなかった」

「そう、クレムリンには赤龍隊が一番乗りをした。他の隊も、別の地区で目覚ましい戦果を挙げたようだ。そして北熊セヴェルメドヴェーチの部隊は、まだ市街地に入っていない」

「君が、合図を送らなかった。むしろ、来るなど制した。そうだろうか？」

イルベチェフはしばし、言葉を探していたが、いまだ続くモスクワ市民たちのシュプレヒコールに促されるように、やがて重々しく口を開いた。

「怖かった。敵になじんでしまった、このモスクワという街が。明日には俺自身すらその一員になっているかもしれないという可能性が。いや、今すでに、そうなのかもしれない。市中突入を過度に恐れることで、啓示軍オフエンバーレナを利するよう、働きかけを受けているのかもしれない。わからない……、わからない。今現在、俺というものが、俺自身の制御下にあるのかどうか……」

「安心したまえ、カネジュ・イルベチェフ。悩んでいるうちは、おそらくまだ、大丈夫だろう」

「フムン。自分の体が入れ替わっているのに気づかなかった御仁が言うのだ、説得力があるな」

「皮肉はよしたまえ。――それで、信頼主義による紐帯の恐ろしさを実感した君は、北 熊<sup>セヴェルメドヴェーチ</sup>の参戦をどこまで引き延ばそうというのだい？ 私の肉体が例の物とともに保全され、君たちがSMITS<sup>スミッツ</sup>や啓示軍<sup>オフエンバーレナ</sup>に劣らぬ秘技の極意を手に入るまで、か？」

「それは最低限の条件だ。北 熊<sup>セヴェルメドヴェーチ</sup>の勇猛な朋友たちが、君の追う E5<sup>エーフユンフ</sup>だけを慎ましく駆逐対象<sup>くちく</sup>から外してくれるとは、期待できない。おみくじで二連続の大吉を狙うようなものだ」

「では、他の条件とは？」

「ふたつある。ひとつは、暖炉の谷で可能だったように、啓示軍<sup>オフエンバーレナ</sup>の精神的な軛を打ち破る作戦行動のめどが立つことだ」

「なるほど。あの米軍機の狙いも、それかもしれない」

「それとは？」

「地下鉄にある砂時計だ。君も見ただろう。あれに違和感を感じなかったか？」

「ただのシェルター用保護設備ではないのか。となると、問題は複雑だな。破壊してくれるのならいいが、回収でもされて、合衆国にこの技術が渡ってしまうのは最悪だ。暴動に手を貸したほうがいいかもしれないぞ」

「待て待て。あれは所詮<sup>しょせん</sup>、簡易的な端末だよ。技術の本質は別のところにある。勝手に壊してくれるぶんにはいいが、今我々がそれに時間を浪費するべきではないよ。それよりも、北 熊<sup>セヴェルメドヴェーチ</sup>部隊投入のための、もうひとつの条件とはなんだね？」

「それはダーリヤたちが……」

と、そこでイルベチェフは急に口をつぐんだ。

「どうしたね？」

喋りすぎたとの自戒<sup>しゃべ</sup>とも思えたが、イルベチェフは暗器を潜ませたポケットへ手を伸ばしている。汪もまた、近づいてくる足音に気づいた。ダーリヤのものにしては、重々しい。槍と盾を構える。

「いま、ダーリヤと、いったな」

獣が苦勞して人語を習得したような声だった。全身が包帯に包まれた巨漢が、街頭の灯りを背にして立っている。

「マミー トゥゲザ？」

イルベチェフが誰にとも無く問う。汪<sup>ワン</sup>は実際にそんなキャラクターが居るかは知らなかったが、この男の出で立ち、体格には覚えがある。昼間、病院で会った男に相違あるまいと、直感が告げていた。汪を見て、興奮して駆け寄ろうとしていたから、おそらくは汪の借りている肉体、江藤博照の知己<sup>ワン</sup>だろう。バログの発生とともに意識を失った汪は、その後、包帯男がどこへ去ったのかはわからなかったし、今の今まで、優先事項の低い問題として意識から外していた。

「ダーリヤとは、バットゥゲザの、ダーリヤか？」

「そうだ」汪<sup>ワン</sup>が即答する。「君は？」

「お仲間、だ」

包帯男は不意に咳き込んだかに見えたが、ふたりは彼の口角が上がっているのを見て、笑っているのだと気づいた。

——レジスタンス。

汪ワンが閃くと、包帯男が怪訝けげんそうな顔をした。イルベチェフが何か言葉をかぶせようとする気配を示したが、より早かったのはゴン太だった。本物の獣の唸りをあげている。

彼の敵意が向けられた先は、包帯男ではなく、バードデーモンだった。着地時に折り畳んだ翼が、かすかに変形している。

「離陸するのか」

「いや、違う」

ジェットエンジン、ロケットエンジンともに稼働していないことを汪ワンは察知していた。地球上で機兵が脚力だけで飛び上がることを、万有引力は許容しない。高度なバルムンクシステムを備えるノイエトターなどは別だが、知られる限り米軍にその技術はない。彼らはそれに代えて別の技術を磨いた。揚力拡大機能を発揮する「ダイダロスシステム」。

バードデーモンは変則領域の見えない翼で急激な気圧変化を発生させ、市民に頭痛などの非致死攻撃を行おうとしている。ゴン太はその兆しにいち早く反応したのだ。——そう確信を抱いた汪ワンは叫ぶ。

「撃て！」

時間の猶予は僅わずかだった。汪ワンの予想と違たがわぬ気圧攻撃が到来したのち、まっすぐ立っていられたのは半数以下だった。多くが頭を押さえて呻き、あるいは、路面に膝をついている。

汪ワンは平気だった。江藤博照の体をあくまでリモコン操作している、その意識を強めたからか、痛みが壁一枚隔てた幻覚のように感じられる。ミイラ男と、イルベチェフも顔をしかめつつ、体勢を保っていた。しかし汪ワンの足元でどさっと倒れたものがあった。ゴン太である。

実時間として、気圧攻撃は数秒しか続かなかった。汪ワンの叫びが届いたものか、さきほどロケットランチャーを構えていた仮装戦士が、引き金を引いたのだ。バードデーモンの片割れが損傷を受けている。

「吉と出るか、凶と出るか」

つぶやいたのはイルベチェフである。汪ワンも全く同じ気持ちだった。——被弾したほうのバードデーモンが、手にした拳銃型の機関砲を、ついに市民たちに向ける。

獣の咆哮が轟く。ミイラ男が大きく振りかぶって何かを投擲とうてきし、空中で炸裂さくれつ。瞬く間に煙幕が展開される。

「逃げろ、散れ！」

ミイラ男の叫びが聞こえたかと思うと、汪ワンは腕を引かれて走り出すことになった。ビルの隙間に沿う方向だが、本来通路ではないのだろう、灯ともしびに乏しいなか、汪ワンは何度も凹凸に躓つまづく。ただミイラ男のほうも、片足が不自由らしく、汪ワンが大きく引き離されることはない。

イルベチェフがすいすいと走ってきて、ふたりを追い抜いた。何か担いでいると思えばゴン太である。

「そこ、上れ」

ミイラ男の指示で、非常階段らしき鉄板構造に足を踏み入れる。ここでも汪ワンは何度も脛すねをぶつけた。カンカン、ゴツン。——ドドドドドド。

ついに機関砲らしき連射音が響き渡る。

聴いたことのある音だと汪は気づく。四〇ミリ砲ではない。これは、五七ミリ砲。他人の耳でも間違いようがない。

ミイラ男に案内されるまま階段を登りきり、ビルの屋上に出ると、事態を一望のもとに把握できた。通りの手前側に擱座したバードデーモン。もう片割れが低空にホバリングし、通りの奥側へと断続的に発砲中。その相手、火災の炎に照らされて威容を曝け出しているのが、汪の思った通り、五七ミリ砲搭載の対空自走砲「アルゲン」だ。

アルゲンは対空ミサイルに頼らず艦載級の機関砲で対空戦をやろうという、前時代的な試作車輛だったが、オフエンバーレナ 啓示軍戦争の勃発がその量産化を後押しした。オフエンバーレナ 啓示軍の擁するノイエーターやグルーテイル等の航空戦力は高出力レーダー波や巧みなバルムンクフィールド操作でミサイル誘導を無効化するため、とにかく火力だけはあるアルゲンの五七ミリ機関砲が、馬鹿と銃は使いようとはばかりに注目されたのだ。汪は同僚が戦略軍参謀本部でロビー活動し、その道筋をつけたことをよく覚えている。じきに、その同僚は汪の上官となるだろう。

そのアルゲンだが、足は決して早くないし、装甲防御も特に秀でるわけではない。オフエンバーレナ 啓示軍が撤退傾向とはいえ、まだアルゲンを市中まで進ませられる情勢ではなかったはずだった。だとすれば、オフエンバーレナ 啓示軍が鹵獲して運用している車輛がしんがり 殿として残っていたか、あるいは……。

「出て行け、さものうば落ちろ、アメリカース！」

砲声の合間に拡声器から聞こえてきたのはダーリヤの声だった。

「あいつめ、米軍機を見て完全に血が上ったな。俺たちのサポートをどうしてくれるんだ」

ゴン太を担いだままのイルベチェフが悪態をつく。視線では、流れ弾の行方の方を気にしている。

さらに言えば、亜細亜連邦とアメリカ合衆国の薄氷の同盟関係をも、危ぶませる事態だと汪は分析していた。解放を支援するために投入した、米軍にとっても虎の子の機兵戦力を、亜連軍残党の地下化したものであるレジスタンスが、破損させたのである。パイロットの死傷ともなれば、なおさら彼の国の国民感情を悪化させるだろう。

「想定事項。だから、俺が、来た」ミイラ男が自分の胸板を叩いて見せる。「セルゲイだ。集会の余裕はなくなった。俺が、このまま、案内する。エーフェンフ E5 のところへ」

最後の言葉を聞いて、汪は至急検討中だった国際関係の対応策をかなぐり捨てた。フィー、ウルゼル、そして何より自身の肉体を取り込んだオルロフと再会できるならば、これに勝る作戦目標はない。ダーリヤが米軍の増援に囲まれて討ち死にしようと思ったことではなかった。

メンバーを入れ替えた三人と一匹が、再び前進する。ミイラ男セルゲイが目指すは、やはり地下鉄の駅だった。赤の広場の戦いから、ただちにフィーたちは逃れた。地下鉄を閉鎖されるリスクはあるが、数時間の停滞のビハインドを取り返すにはそれしかない。

戦闘を迂回しての移動。その間も、汪は砲声や野次馬の声、そしてダーリヤの罵声などから状況を推測した。バードデーモンは僚機を見殺しにできないらしく、かといってアルゲンに対して攻勢に出るわけでもなく、にらみ合いに持ち込んだようだった。自陣営の増援を当てにしての選択とも言える。しかし、レジスタンスも集まってくるだろう。米軍はモスクワ市内のレジスタンスの勢力を過小評価している。

やがて一行は、ダーリヤ騎乗のアルグンを背にする街路に回り込んだ。辺りのビルに空いた穴から竈のように煙が上っている。バードデーモンからの射線が通っている証拠であり、そんなところを悠長に徒歩移動してはいられない。汪はセルゲイのあとを足早に追おうとして、不意に、その肩にうしろから抱きつく恰好になった。危うく、後詰めイルベチェフとの間でサンドイッチにもされることだった。

「どうした、君」

問いかける汪に、セルゲイは振り返らず答えた。

「熱い、抱擁は、あと。市長の、お出ました」

セルゲイと横に並んで立った汪は、十メートルほど前方の路上で大破していた自動車のルーフに、黒づくめの女がよじ登っていく過程を見届けた。たしかに汪はその容姿をテレビ放送や新聞で見知っている。ダヴィーチェ・ドルグシキン。啓示軍に降った売国奴とも、女狐とも呼ばれ、汪自身もそう見做して憚ることのなかった、モスクワ市長である。しかし、その黒衣の出で立ちが彼女のトレードマークというわけではない。まるで喪服だった。

スカーフを風にたなびかせ、ルーフ上に屹立ったドルグシキンは、手にした拡声器を握りしめると、大きく息を吸い込み、止めた。閉じられた双眸が、数拍の間をおいて再び開かれたとき、汪は秘められた熾火が酸素を得て燃え上がるさまを幻視した。

――似ている。しかし、何に？

汪が胸中の疑問に戸惑っているうちに、ドルグシキンの歯切れ良い声が拡声器を通じて発せられる。「双方、ただちに戦闘を停止せよ。このモスクワでの無益な争いを、私、ダヴィーチェ・ドルグシキンは認めない。繰り返す。双方、ただちに戦闘を停止せよ。従わぬ者は、全モスクワ市民を敵にするものと思え！」

その宣言は、まるで正義の味方が悪の首領につきつけた、最後通牒だと汪は思った。

――そう、パンタロンだ。姿は違えどこれはパンタロンの精神的仮装といってよい。

而して、その言葉は、現実を動かす力を持っていた。

ダーリヤのアルグンが砲塔を明後日の方向に向けて停止させ、滞空していたバードデーモンも、拳銃をホールド位置に移動させ僚機の隣に着地。直接言及されなかった仮装かつ武装行列の人々も、それぞれ得物を路上に投げ出した。

いっときの静けさのあと、しだいに夜の通りに反響していくのは、市長を称える数多の人々の呼び声。戦闘が始まって退避していた仮装者が再び通りに溢れかえり、頭上のビルの割れた窓からは、そこで夜を明かそうとしていたらしいオフィスワーカーたちが顔をのぞかせている。

これがダヴィーチェ・ドルグシキンの力かと、汪は戦慄した。すると、汪がまじまじと見つめていたその顔が何かを探すように不規則に動き、やがて汪らのほうへと向いて固定された。

「レジスタンスの方々」ドルグシキンは確信を込めてそう呼びかけたようだった。「あなたがたには、これまで以上に期待をしています。この街には新たな秩序が必要になる。いたずらな衝突はくれぐれも慎んで」

「はっ。市長殿」

イルベチェフが、実際にはレジスタンスではなくせに、いちばんに良い返事をする。横目で窺

うと、セルゲイも敬礼している。汪もしかたなくそれに従う。

市長は満足したようで、別の市民たちへと声をかけ始めている。しかし、汪たちはすぐに駅への移動を再開することができなかった。

「どうする？」

イルベチェフが問うたのは、聞き返すまでもなく、市長を囲もうとする群衆に巻き込まれているからである。いましがたお声掛けがあったのを見た者もあり、こちらへ話しかけてくる気配も多数ある。このまま捕まると面倒だが、人垣を無理にかき分けようとして、揉め事を起こすのも避けたい。「さて……」

汪が思案していると、何やら別に接近してくる足音に気づいた。人や犬のものではない。機兵である。そして汪には音の微妙な違いからさらに詳細な推定が可能だった。これは亜細亜連邦軍の龍のものだ。

戦闘機動ではない。街並みや人を蹴散らさぬよう、注意を払ったセミマニュアルモードでの足取り。しかし決してその歩みは遅くない。操縦経験に富むパイロットにしかできない歩調だと汪は看破する。

不意にスポットライトが当てられる。汪たちが目を細めているうちに、光は路上を這い進み、車上で市民の歓声に答えていた市長へと浴びせられる。

『お探ししておりました、市長』

実直そうな男の声が頭上から降ってくる。それはスポットライトの光源と方向を同じくしていた。振り返ればそこには二機の龍が立っている。

『外廓聯、赤龍隊の Maksim・ペトロフです。市長をお迎えにあがりました』

赤龍隊と聞いた汪は、日没前の交戦を思い出し、とっさに逃げ出そうとした。しかし、急に肩を抱いてきたセルゲイの腕力により、その場に押し留められる。

「おう、おっ、ああああっ！」

セルゲイが吠える。病院のときと同じように。撒き散らす唾が汪の頬に飛んでくる。

威嚇ではないのだと、汪は悟った。これは感情が昂じたものだ。セルゲイ自身の頬を濡らしているのは、決して唾液ではない。唾液は瞳から筋をなして流れはしないものだから。

ドルグシキンを照らし続けている龍が、おそらくペトロフ大尉の乗機。もう一機は、手にケーキ箱のような筐体を抱えており、ゆっくりと道路を進んで近づいてくる。近づくにつれてその正体が判じた。汪も何度か便乗した経験のある、要人輸送用のコンテナだ。赤龍隊がドルグシキンを迎えに来たというのは、米軍やダーリヤの暴走を前にした即興の演技というわけではなく、本当に予定された行動らしい。

市長のほうも、何らの動揺を見せず、出迎えを拒むこともなかった。背後の側近らしき数名にいくつか告げると、颯爽と車のルーフから飛び降り、路上に静置されたコンテナへと乗り込んでいく。そこにレッドカーペットでも敷かれているかのように。

人々の注目が市長の収容に注がれている今が、移動の絶好の機会だった。察したイルベチェフもゴン太をいったん脇に下ろし、セルゲイの腕をほどくのを手伝ってくれたが、見た目以上のその

りよりよく すさ  
膂力は凄まじい。もう叫ぶのはやめていたが、視線はペトロフの龍<sup>ロン</sup>に釘付けになっている。

「たい、ちょ……う……」

セルゲイがうわ言のように繰り返しつつぶやいている。

——そういえば、赤龍隊にセルゲイという名の男がいたのではなかったか。

汪<sup>ワン</sup>は江藤博照の経歴を洗った際に取り寄せた、江藤在籍時の赤龍隊の名簿を思い起こす。隊長、マクسيم・ペトロフ大尉。階級順に、同じく大尉の江藤博照、そしてセルゲイ・リー中尉。ヴィオレットヴィカールのコックピットで束の間肉体に戻った江藤が呼ばわった下士官らの名も、然<sup>しか</sup>とは思い出せないが、そこにあった気がする。

セルゲイの熱烈な視線を、ゲリラ兵の攻撃を絶えず警戒しているはずの赤龍隊隊長が見逃す道理はなかった。市長を照らしていたスポットライトが、コンテナ収容が終わるとともに、汪<sup>ワン</sup>たちに差し向けられる。もちろん周囲の耳目も集まった。

『懐かしい顔がいるな。おまえたちにも来てもらおうぞ』

隊長機が近づいてくる。ロックオンされたのは、セルゲイばかりではあるまいと、汪<sup>ワン</sup>は逡巡する。ミイラ男をセルゲイと判別できたかはむしろ怪しい。安っぽい仮装のゴリラトゥゲザが江藤博照であることのほうが、よほど明瞭である。

——では、外廓聯の所属歴がない者なら。

心の声が届いたか、イルベチェフが汪<sup>ワン</sup>と視線を交わす。

「同志、こちらは任せろ。ダーリヤとうまくやる」

「頼む。貴君を信頼している」

小さくうなずき返したイルベチェフがそっと離れていく。汪<sup>ワン</sup>は力の抜けたセルゲイの腕からようやく抜け出足、いまだ自立できないでいるゴン太を抱きかかえ、機兵の迎えを待った。

隊長機の<sup>てのひら</sup>掌が開き、ふたりへ迫ってくる。

「フムン」

偉大なる女傑と乗り合いというわけではないようだった。

### 三

機兵の指にしがみつくと、快適と言いつつ難しい輸送サービスにて汪<sup>ワン</sup>が連れて来られたのは、もはや勝手知ったる、<sup>エルヴェイクス</sup>RWXの工場だった。考えてみれば、十分な補給物資や整備機材を伴わず市中突入した先鋒部隊にとって、ここに勝る<sup>きょうとうぼ</sup>橋頭堡はない。すでに深夜となっているが、工場内はかつてないほどに煌々と明かりが灯されており、数値制御式の吊り下げクレーンがあちこちを行き来して、機兵の応急修理や装備変更作業が進められている。そうした様子が、意図したにせよしていないにせよ、亜細亜連邦軍が残敵掃討のフェーズに移行したつもりであることを雄弁に物語っている。

汪<sup>ワン</sup>が放り込まれたのは、整備場を一望できる監視室であった。昼間の戦闘で設備の半分が動作しなくなっているが、見晴らしは健在である。窓がなくなったぶん、視界がよりクリアになったと、好意的に捉えることもできる。

昼まではヴィオレットヴィカールの定位置であった一角を、汪<sup>ワン</sup>は我知らず探していた。そこには

すでに新たな主の姿があった。シルエットから、龍<sup>ロン</sup>の複座型かと思いきや、それは汪<sup>ワン</sup>の早とちりだった。肉太の骨格に合わせて、顔面に隈取りを象られたその姿は、遠目に見てもまず間違いなく、龍王<sup>ロンワン</sup>の肆番機。暖炉の谷以来の再会である。またぞろSMITS<sup>スミッツ</sup>の気まぐれな改修を加えられたようで、暖炉の谷では両肩に大型の推進器を懸架していたが、今は多連装擲弾筒「鬼火<sup>オニビ</sup>」に似た飛び道具が取り付けられている。推力系統は形を変えて腰回りに移設したようで、汪<sup>ワン</sup>は、どっしりと腰が据わった印象を受けた。

——誰が乗るのか。またフィーのような年端も行かぬ少年少女を乗せているのではあるまいな。

汪<sup>ワン</sup>はステンレスの深皿で渡されたホットミルクを啜りながら、以前の龍王<sup>ロンワン</sup>乗りを思い出していた。暖炉の谷で二機一袋の僚機として行動をとともにしたが、決して肉声では通信しとせず、常にテキストメッセージでのやりとりだった。その理由を今になっても汪<sup>ワン</sup>は開示されていない。龍王<sup>ロンワン</sup>の急激な機動にそなえて、舌を噛む危険のある通常発声は戒められているのか、あるいはパイロットの外部との通信<sup>ロンワン</sup>を龍王の内部処理ですべて検閲しているがゆえに、テキストでしか出力してこないのか。それとも……。

ほとんど少女にみえる細身の少年、フィーがノイエーターのパイロットであったという事実は、汪<sup>ワン</sup>にとって正直、衝撃であった。高度なバルムンクシステムの塊である機兵を、教育も行き届いていない未成年が扱うことには、汪<sup>ワン</sup>はもとより反対の立場であった。いくら反射神経や適応力に優れようと、最低限、わきまえておくべき知識、見識というものがあると考えるのだから。しかし、なにごとにも実力至上主義の金星也<sup>キムソンヤ</sup>の影響下にあっては、未成年者を多く登用する外廓聯の慣例が改まる気配はなかった。いかんせん、見識が派手な成果に直結することは残念ながら稀である。反面生じうる、派手な失敗をやらかさぬために、見識が要るのだ。

——私が覇権を握った暁には、そのような不見識は一掃しよう。

汪<sup>ワン</sup>は将来に思いを馳せて、思わずくつくつと笑う。

エトガルの構築した“雲<sup>クラウド</sup>”のシステムは有望だ。オルロフを介して人の意思を伝達する仕組みは、砂時計を必要としない点で、啓示軍<sup>オフェンバーレナ</sup>の従来の精神操作手法に優位性を持つ。それでいて、世論操作という観点で、より具体的なイメージを植え付けることが可能になるだろう。啓示軍<sup>オフェンバーレナ</sup>は変則領域を用いて人の情緒に影響を与えることが、いかに組織や社会を強固にするか証明した。汪<sup>ワン</sup>はその道具をより巧妙に、芸術的調整のもとに運用する自信があった。汪<sup>ワン</sup>ならばやれる。汪<sup>ワン</sup>と、エトガルが手を組めば。

やることは多い。本来最優先すべきはウルゼルやフィーたちとの合流だが、こちらはイルベチェフに託した。すると次点は、ヴィオレットヴィカールの確保で、汪<sup>ワン</sup>がおとなしくここまで連行されたのも、亜連軍が回収しているかもしれないと目論見<sup>もくろみ</sup>があつてのことだった。だが、この工場にないとすると、やはり赤の広場を自ら確認する必要があるだろう。機体回収が難しければ、最悪、データを収めたディスク類のみ救出し、木端微塵<sup>こっばみじん</sup>に破壊することになるだろう。いずれにせよ、足がいる。

一方で、行動の制約は増えた。亜連側でただひとり汪<sup>ワン</sup>の事情を知るイルベチェフと別行動になったうえに、体の主である江藤博照をよく知る者たちと、お近づきになってしまった。

赤龍隊隊長マクシム・ペトロフは、「江藤博照」が仮装してモスクワをうろついていたことに疑念



を持ったようだった。さもなりんと汪<sup>ワン</sup>は思う。黒龍隊が作戦に参加しているなど初耳であろうし、実際、黒龍隊は横浜で啓示<sup>オフェンバーレナ</sup>軍や九天軍と戦っていたのだから、モスクワへの転戦は命じられていないであろう。

――さて、何と言って取り繕うか。

それを考えているはずが、集中はできなかった。考えがオルロフの手違いで漏れてしまうという問題もあるが、何より、他に気になるものが目に入りすぎる。汪<sup>ワン</sup>の視線は再び龍王<sup>ロンワン</sup>に吸い寄せられていた。

「そう睨みつけなさんな。大尉は、本当に龍王<sup>ロンワン</sup>嫌いだな」

急に声をかけられて、汪<sup>ワン</sup>はミルクを少し噴き出した。

「いたのか、セルゲイ」

顔面の包帯を外し、表情を顕<sup>あらわ</sup>にしたセルゲイが入って来ていた。隣に腰掛ける。こうして灯りのもとで見れば、その顔には戦傷と思し痕跡が広範囲に分布している。

「大尉は前から龍王<sup>ロンワン</sup>を気味悪がっていた。マクシム隊長から代理で機体を取ってこいと言われたときも、フケて俺に任せたよな。ま、たしかにあのインタフェースはちと難物だが……」

そう思い出語りをするセルゲイ・リーの口は、打って変わってなめらかである。あいかわらず息を吸いながらのような特殊な発声ではあり、ミイラ男と同一人物なのだということは確信できるが、汪<sup>ワン</sup>はその変化を奇異に思っていた。工場に到着次第、医務室で処置を受けてくると言って別行動していたが、それは包帯のことではなかったのか。発声を支援する機器の調整を受けたのかもしれない。

「あれは隊長用か」

深く思索するのを避け、汪<sup>ワン</sup>は龍王<sup>ロンワン</sup>に関する会話に意識して集中する。

「フム。さっき俺たちを運んだときの様子じゃ、マクシム隊長の龍<sup>ロン</sup>はだいぶ無理を重ねた様子だった。頃合いとは思うが、しかし隊長が乗るにしちゃ、ちょっと趣味がちがうんじゃないかと思うがね。

ま、SMITS<sup>スミッツ</sup>の連中はだいたい頭のネジが何本か飛んでる。わかってないのはいつものことだよな」

たしかに、龍王<sup>ロンワン</sup>のまわりで作業をしているのは軍人ではなくSMITS<sup>スミッツ</sup>の職員のようなものである。外郭聯の転戦ツアーに随行することが多い彼らは、こんな最前線でもテキパキと仕事を進めている。遠くで判らないが汪<sup>ワン</sup>の知人――やはりネジは飛んでいる――もいるかもしれない。

ドアがノックされ、返事を待たずに開かれる。噂をすれば、マクシム・ペトロフの登場である。

「揃っているな。少し話をしたい」

マクシムのトレーには、湯気を立てた三つのコーヒーカップ。汪<sup>ワン</sup>は、手にしていたミルク皿に目を落とす。

「江藤、それは、毛の長い連れのぶんだぞ」

「――さもあらん」

汪<sup>ワン</sup>は、すっかり忘れていた足元のゴン太に皿をやる。気配を消して伏せていたハイイロオオカミは、のっそりと立ち上がり、皿のミルクを飲みはじめた。

「ぬいぐるみのようだった狼が、大きくなったものだな。面倒見のいいおまえのことだ、後方勤務な

らきちんと育てるとは思っただけで……。最前線に連れてくるとは、あいかわらず常識というものがない」

「預かったからには、責任が伴いますので。市ヶ谷の椅子を温める暇もなく、思いがけず黒龍隊を預かる身となり、隊長の苦勞を思い知りました」

「よせ、おまえの社交辞令は皮肉にしか聞こえない」

「これは失敬」

汪は肩をすくめてみせる。江藤博照らしい言行を想像しながら演じるしかないが、これはうまくいったようだった。マクシムはトレーを焼け焦げた操作卓の隙間において、腰を下ろす。

「ダーダネルス作戦でのことは聞いている。いろいろあったようだが、隊を率いて戻れたのなら、任を果たしたと誇っていい。その点、俺は多くの失敗を犯した」

「いっこなしですぞ、マクシム隊長」セルゲイが椅子を寄せ、カップを受け取る。「あの撤退戦でも、隊長の指揮はいつものように的確だった。殿の俺がしくじった、ただそれだけのことで。たしかに死にかけたが、こうして生きてる」

「よくぞ、生きていてくれた」

「乾杯といきましょう、コーヒーですが」

セラミックのくぐもった反響。誰かの涙すずりがまじる。

コーヒーを一口飲み下したマクシムは、滲み出ている感情を抑えるように、カップを置いた。

「経緯を聞かせてくれ、セルゲイ。啓示軍はおまえを捕虜にしていたのか？」

「そんなところで。コックピットに直撃を喰らい、剥離片が突き刺さってサボテン状態になっていた俺は、治療が先決でことで病院に送られたそうですが、脳が割合やられてたんで、そのあたりのことはあとから聞いて知っただけです。尋問もアタマが朦朧としているうちに済んだらしく、しっかりしてきてからは、モスクワに移ってリハビリ生活。喋るのにはずいぶん苦勞をしましたが。幸い、早くから手は動いたので、もろもろの機械修理をやって食いつないでたってわけで」

もう何度も繰り返し語ったであろう身の上話を、セルゲイはこともなげに語ったが、聞いた汪のほうでは吐き気を必死にこらえていた。むやみに思考を深めないために、聞いた話の情景をひたすら思い浮かべるように意識していたが、それが仇となった。ダーリヤの夕食のスープから、腸詰めにまじってセルゲイの頭が浮いてくるイメージが、脳裏に焼き付いてしまった。

「大尉も、思い詰めないでくれ」

セルゲイが汪の肩を叩く。

「そういうわけじゃない。ところで、俺は、少佐になったぞ。聞いてはいないか」

話の流れからすると、セルゲイは江藤が外廓聯を離れる前に、行方不明となったはずである。敵であった啓示軍に助けられ、啓示軍を受け容れたあとのモスクワに住み着いたといい、しかしながらレジスタンスに参加してもいるらしいセルゲイが、どの程度黒龍隊のことを知っているかは気になっていた。汪はいま、江藤博照の体でこのモスクワをうろつかなければならないし、イルベチェフと画策していた内容——深くイメージすることは避ける——も、セルゲイにむやみに言いふらされては困るのだから。

「そうなのか！ それは、めでたいな。あんな不祥事やこんな不祥事も帳消しにしてもらえたってわ

けだ」

「セルゲイが知らないのも無理はない。俺とて、ダーダネルス作戦から引き上げたあとの黒龍隊の話はほとんど聞いていない。せいぜい、日本で機兵の試験をやっている、ということくらいだな。それが夜のモスクワで狼の散歩中とは、さすがに予想外だった。しかも、行方不明のセルゲイと一緒にときている」

「それは、ちょっと、野暮用で」

汪はいかにも教養のない武官が曰いそうな台詞でごまかす。

「それで済むか、と怒鳴りつけたところだが、もはや部下でもなく、あまつさえ任務優先度 <sup>ダブルエー</sup> AA を与えられたおまえに、無理強いできる筋合いはない。だが、敢えて問おう。何を企んでいる？」

企みと言われて、つい自らの計画の全貌を思い浮かべそうになり、汪は慌てて別のことを考える。心の声が伝わってはまずい。特に、啓示軍基幹部隊と懇ろにしていたなどと露見してはならない。

目を泳がせると、三度、龍王の姿に吸い寄せられた。

「――龍王。SMITSがあれを持ち込むとのタレコミを受けた軍事委員会が、小官に密命を下し、市民の退避オプションを調査していたのであります。なにせ元老院派は、暖炉の谷でもあれを使い、核弾頭を運用しようなどという面倒を起こした。二度目がないとは言えない。いっそ龍王を見つけて破壊したほうが早いんじゃないかと思っていたところでした。渡りに舟だ」

実体験が半分、嘘が半分であるが、汪は自分の編集したストーリーの世界に深くはまり込む。この方法は副作用もあるが、オルロフが余計な声を伝送するのを妨げるうえでは効果絶大だとわかった。森羅万象の癖を巧みに利用する、特別運用調整官の本領を発揮するべきシチュエーションである。もちろん、オルロフのことを知らないであろう二人に、余計な知識を与えるような愚は犯さない。「穏当ではないな。核弾頭を、まさかモスクワでは使うまい」

果たして、マクシムは乗ってきた。

「いや、それはある」と、セルゲイ。「いや『あった』というべきだな。まえのモスクワの戦いで、亜連軍は核ミサイルを使用していた。領土内だなんてことは、関係なかったんだ。この話はモスクワじゃ公然の秘密だ。ニキビっ面のティーンエイジャーだって知っている。俺たち軍人が知らなかったのは、とんだお笑い草だ」

「――その話、にわかには信じがたいな。まだモスクワのすべてを見たわけではないにせよ、核爆発があったようには見えない。江藤、おまえはどうだ？」

「そうですな、核爆発の痕跡は、見ておりません」

実のところ、セルゲイの話は汪も初耳だったので、そのくらいしか即答できない。

「邪魔が入ったからだ」セルゲイは続ける。「ノイエーターが阻止したとも、影龍が邪魔をしたとも言われているが、定かじゃない。啓示軍は前者だと喧伝していた。ベルリンの絶対防壁とやらがあるくらいだから、確かにそれくらいは可能なんだろうなという気はする。だが、無力化は完全じゃなかった。熱線は封殺されたが、電磁気パルスの一部は撒き散らされた。おかげで、BFGをろくに持たない守備側はレーダー探知も通信もままならず、BFGを個別搭載したエントゼルトゾルダートのまえに、あっさりと駆逐されたってわけだ」

「そのあたりの経緯は、戦略軍が掴んでいるはずだが」と、汪。「情報部と参謀本部の内部でしか共有

されていないだろう」

「ダーダネルス作戦を機に、外廓聯は金星也元帥の直轄になったが、だからといって情報開示が増えた感触はない。俺たちはただ任務を言い渡され、その達成に全力を尽くすまでだ」

「それが市長の護送でも、核弾頭によるモスクワ浄化でも同様にですか、隊長殿」

「もちろん、個人的には望ましいことと思えない。しかし、戦略軍の決定事項であれば任務は遂行するのみだ。それがもっとも良策だと、亜連最高の頭脳たちが決定したのだから。――苦悩は、決定を下した彼らにこそある」

「市民にその話が通じるかな？」セルゲイはなお食い下がる。「いや、市長に、か。だからドルグシキンを迎えに行ったんでしょう、隊長殿。市長の言葉なら多くが納得をする。彼女にはそれだけのカリスマがある。でも、実直なマクシム・ペトロフが自分で考えるような作戦じゃない。いったい誰の命令だ？」

「ノーコメントだ」

汪は、マクシムが隠したその作戦の発案者に見当がついた。しかし、その先を深く考えるのはあとにとっておく。

短い沈黙ののち、セルゲイがまずそうにコーヒーを飲み干した。

「二度と飲みたくない味だ。原隊復帰は考えものだな」

「好きにしろ、と言いたいところだが、おそらくおまえは情報部に引き渡されるだろう。セルゲイ、これは忠告だが、啓示軍に毒されたとは思われないよう、言動に気をつけろ」

「まあまあ、落ち着こうじゃないか、ご両人。核が持ち込まれているかもまだ調査中、それを指示したのが参謀本部の正式ルートかもまだわからない。元老院派の独断ということもあるわけだし、組織の統帥を脅かす動きがあるなら、これを阻止することに異論はないでしょう」

とりなした汪は、ふたりのきょとんとした視線に見返され、たじろぐ。

「まさか、おまえに仲裁される日がくるとはな。たしかに言うとおりのことだ。核弾頭の話は、俺のほうでも確認をする。――が、江藤。おまえこそ龍王を破壊するなどと言っていたが、どうする気だ。憶測段階で、それをみすみす許す俺ではないぞ」

「ま、壊すのは白黒ついてからでしょうな。いや、もっと良い手があったか……」

汪は万全に整備されつつある龍王を眺め、口角を上げた。

「私が乗ればいい」

## 四

舞台の控室にある鏡は、古く、曇っている。そこに映し出されたバレエダンサーの顔は、フィーのものだ。頬を伝った涙が鏡台に落ち、光る。

「大丈夫か、フィー」

汪は微かに震えるその肩に手を伸ばそうとしたが、遠く届かない。歩み寄ることが、できない。

――足がないのだ。

傷痕というわけではなく、己が移動するという概念がこの空間にはないらしい。汪はそう理解す

る。ここは夢の中だ。

フィーはエトガルの名を小さく、繰り返し、呼んでいる。

「フィー、聞くんだ。カネジュ・イルベチェフという亜細亜連邦軍の将校がそちらへ行く。うまく接触して、保護を受けてくれ。そうすればエトガルとも会える」

エトガルの名に反応し振り返ったフィーの顔は、のっぺらぼうのようだった。しかし、よく見ると違う。顔がないのではなく、霧に包まれたように、その様子を窺い知ることができないのだった。

「フィー」

「あなたは……誰……？」

「何を言う。私は……」

汪<sup>ワン</sup>は、フィーの隣の鏡台に、自らの姿が映っているのを発見する。江藤博照の体格ではない。本来の汪凱威<sup>ワンガイウェイ</sup>自信の肉体。

しかし、そこには顔がなかった。

ブザーが鳴り響き、舞台の幕が上がる。

「大丈夫ですか、江藤少佐」

汪<sup>ワン</sup>は狭苦しいコックピットに体を押し込めている自分に気づいた。心配そうに顔を覗き込んでるのは、知り合いのSMITS職員である。いつも少し眠そうな目をしている印象の、小柄な女性。名前がすぐには出て来ない。

「大事な。少し頭が重いが」

と言って、頭に触れようとした手が、分厚い強化樹脂の感触に阻まれる。大仰なヘルメットを装着していたのを思い出した。それを糸口に、ここに至る経緯の記憶が呼び起こされる。何かの夢の余韻が去っていく、その寂しさを味わいながら。

「どうか、そのまま。クラスタリングの取り外しはこちらで行います。無理に外すと電極が傷みます」

そこは人体のほうを心配しろ、という憤りが伝わったものか、SMITS職員<sup>スミッツ</sup>がたじろぐ。揺れた名札をちらりと見て、彼女の名を思い出す。ネグレイ。モンゴル人で、姓は名乗らない。少なくとも汪<sup>ワン</sup>の前ではそうだった。汪凱威<sup>ワンガイウェイ</sup>にとっては二年ほど前からの知り合いだが、江藤博照にとっての知り合いでもあるのだろう。当然だと汪<sup>ワン</sup>は思う。SMITSはこの龍王<sup>ロンワン</sup>シリーズに関わらせるスタッフを増やしすぎないように、慎重に制限しているのだから。

龍王<sup>ロンワン</sup>は亜連にとって機密の塊のようなものである。兵器というのは得てしてそういうものだが、この場合は水準が異なる。たとえば、制限を受けるのは開発や整備にあたる人員だけではない。搭乗者も、個別に脳波の登録が必要になる。これは龍王<sup>ロンワン</sup>に採用されている特殊な操縦支援システムの都合上と言われているが、果たしてどうか。公にはされていないが、ブレインマシンインターフェースの研究はむしろ別の機種をテストベッドにして進められていた実態がある。議会派や元老院派との権力争いで劣勢となった軍閥派が、挽回策として秘密裡<sup>リ</sup>に開発していた蛟<sup>チャオ</sup>がそれだ。

そうした事情を汪<sup>ワン</sup>同様に感じていたのか、あるいは武官にありがちな動物的勘というものか、江藤博照は外廓<sup>ワン</sup>にいながら、その戦力の要である龍王<sup>ロンワン</sup>を毛嫌いしていたという。セルゲイも先程

そのようなことを言っていたので、情報の確度は高まった。このクラスタリングなる<sup>くびき</sup> 軛の装着はおろか、事前の脳波登録すら拒んでいたと知って汪は驚いた。

モスクワの空気を吸って気が変わった、などと適当なことを言って汪が登録を申し出ると、ネグレイたちSMITSのチームは歓喜した。聞くところによれば、実戦テストが可能な人員の当てが立て続けに御破算になり、せっかく危険を冒してまで最前線に持ち込んだというのに、何のデータも実績も手に入らないのではと腐りはじめていたところだったという。その当てのひとりがマクシム・ペトロフであったのは察しがついた。

龍王<sup>ロンワン</sup>をかつて使っていたマクシムが、再使用を拒んだ。これは、龍<sup>ロン</sup>がまだ使えると惜しんでのことか。あるいは、名前こそ同じだが一機ずつ仕様の異なる龍王<sup>ロンワン</sup>を、戦場で乗り換えるなどリスクが大きい、という判断か。それとも、もう龍王<sup>ロンワン</sup>は懲り懲りという心証があるのか。江藤と同じ判断にマクシムも行き着いたのかもしれない。

虎穴に入らずんば虎子を得ず。汪は武官たちと異なり、自分の知識と知恵でもって事の本質を見定める力を持っている。そう自負している。クラスタリングの取り外しを終えた汪は、最新テスト仕様のハードコピーをもらい受け、タラップを降りる。その様子を危なっかしく感じたものか、上からネグレイの声がかかる。

「頭痛が続くようでしたら、医師資格のある担当を呼びましょう」

「それには及ばん。医者はこちらで勝手に探すから、諸君らは龍王<sup>ロンワン</sup>の調整を優先してくれたまえ」

「作業が終わるのは明朝です。少し休まれてはいかがですか」

時刻は深夜一時。たしかに一般論として休息の必要は認める立場の汪であるが、今回は少々事情が異なる。

「一時間でできるはずだ」

ネグレイの眉間<sup>みけん</sup>にぎゅっと皺<sup>しわ</sup>が寄ったのには気づかぬふりをして、いそいそと整備場をあとにする。操縦時用のジャケットを脱がなかったのは、もちろん、すぐにでも戻るというサインである。実際、一刻も早くヴィオレットヴィカールを見つけるのに、機兵に乗れるのは持って来이었다。特に龍王<sup>ロンワン</sup>は単機運用が怪しまれず、そして、啓示軍<sup>オフエンバーレナ</sup>の面々からも注目されやすいので、E5<sup>エーフェンフ</sup>もすぐにこちらを察知してくれる。

特別運用調整官である汪は、機兵の操縦訓練を一部しか受けていない。少し体験した、という程度である。しかし、心配はしていなかった。汪がいま江藤の体を使って歩き、呼吸しているのは、汪の脳から江藤の神経へ直接作用しているのではなく、汪の脳から江藤の脳の無意識な領域へ信号が飛ばされ、そこから神経との入出力がされている。これまでの体験から汪はそう考えていた。体を動かす際に感じるラグは、オルロフによる信号の伝播過程ではなく、汪の意識からの指令を江藤の無意識が理解する過程において生じている、ということである。それならば、刹那<sup>せつな</sup>の反応を迫られる近接戦闘を除けば、問題は解消される。一通りの操縦を江藤の体が覚えており、汪はあまり一挙手一投足を意識せず、機兵をどう動かしたいかを念じていれば、今こうして江藤の体を歩かせているのと同じように、操縦が可能だと考えられる。

己を保ちながら、他人の身体を駆使する。夢のような行為だが、しかし汪は恐ろしかった。これ

を可能としているのが、江藤博照の意思であるらしいことに。

江藤は汪に、今しばらく体を預けると言った。そして自身はどこかへ消え去った……ように感じられるが、果たして本当にそうか。かつての隊長マクシム、死んだと思われた戦友セルゲイとの再会というイベントをもってなお、江藤がリモコン状態を解除し、表に出てくることはなかった。その点を以て、江藤が宣言通り精神だけをどこかへ移した、という推定には妥当性がある。

しかし、絶対と言えるのか、汪には不安が残る。

だからこそ早くこの状態を解消したかった。こんな不確かな力を頼らずとも、汪にはエトガルらと作り上げた“雲”がある。データの解析が進めば、江藤に強いられているリモコン状態の解除も期待できる。そのために、現状唯一の“雲”の操作端末であるVV——ヴィオレットヴィカールを取り戻し、運用スタッフと、オルロフも確保する。その暁には、すらりとした正真正銘の体でテンガロンに扮装し、ダーリヤを見返してやりたいと汪は思う。

過度の不安は、冷静な思考の邪魔となる。汪はそう分析し、本当に医務室を探すことにした。

まえに二日酔いの薬をもらいにいったことがあった。施設の主が入れ替わろうと、適切な設備がそこにある限りはそこが医務室であろうと汪は踏んでいた。しかし、道はうろ覚えであった。あのときは誰それが案内をしてくれたが、今は信頼できる仲間がそばにいない。一方で武器もあった。この姿である。啓示軍の潜入を警戒してか、歩哨がやたらとあちこちに配置されていたが、どこを通るにも江藤博照の身分と威容が物を言った。

見覚えのある廊下に出た。工場長ヤナ・シュプリングルと電算室に向かうときだったか、と汪は記憶の糸をたぐる。たしか、バルムンクスタビライザの調整について議論をしていて、電算室のメインフレームで計算上の検証をするということになったのだった。

そのとき、行く手にあるエレベータの扉が開いて、汪は回想を遮断する。

籠からは数名の将校が出てきた。その中央の人物を認めて、汪はとっさにハードコピーの束で顔の下半分を隠す。

金星也。戦略軍参謀本部の長であり、いまや元老院からも信頼を勝ち取り軍の全権を恣にする「総司令」が、そこにいた。

目が合う前に、汪は扉の空いていた左手の部屋へ飛び込んだ。

気づかれただろうか。汪は静かに扉を後ろ手に閉めると、冷や汗が出ない仮初の体に改めて違和感を覚えながら、努めて冷静になろうとした。すでにモスクワ中心部に入っているとは考えもしなかった。むしろ、非人道的と言われるような手段を使ってでもこのモスクワの状況を片付けようとするだろうと、再三、想像してきた。

見間違えではないか？

否。随行していた長駆の男は、金元帥の腹心の部下、神巖大尉に違いない。それならば、やはりあれは金星也だったのだ。

汪は元帥の腹積もりを量りかねた。前線に立って将兵の士気を鼓舞しよう、などと考える質ではない。来ない理由のほうが容易に挙げられる。啓示軍の逆襲に遭うかも知れず、また、彼を敵視する軍内部のさまざまな勢力から、暗殺されるリスクもある。金星也が来るのであれば、この工場に歩哨がやたらと多かったのは納得できるが、その程度で安全を保証できるはずもない。むしろそ

の歩哨が刺客かもしれないのだから。

話し声が近づいてくる。金星也キムソンヤや神巖のものではないが、同じ一行かもしれない。汪ワンは扉を離れて隠れる場所を探す。見られるのはまずい、との強い意識があった。姿も声も黒龍隊隊長の江藤博照だが、その中身は特別運用調整官、汪凱威ワンガイウェイなのだ。そもそも横浜にいたはずの男がなぜここにいるのか、そこからして説明のしようがない。全軍を統帥する金星也キムソンヤに対して、マクシム相手と同じごまかしは効かない。

その部屋は物置きになっていたようで、折りたたまれた長机や椅子のほか、空のキャビネットがあった。これ幸いとキャビネットに潜り込もうとしたが、巨躯が収まりきらない。声はいっそう近づいてくる。足音も聞こえてきた。汪ワンはキャビネットの隣に床置き式のスクリーンがあるのに気づき、それを慌ただしく展開すると、その陰で息を殺す。

「まだ次の予定まで時間があるはず」ロシア語を話す男の声がした。「こちらの部屋で今少しお話をさせて頂きたい」

しかし母語ではなさそうである。日本人のようだと、見当をつける。椅子に腰掛ける二人の気配。「それで、提案と言うのは具体的に？」

応じるロシア語は流暢である。女声。今日どこかで聞いた。

――炎を背にして、眼差まなざしが青く光る。

汪ワンの脳裏にその光景がフラッシュバックした。ダヴィーチェ・ドルグシキン。次の予定とは、おそらく金元帥キムとの面会だろう。赤龍隊に市長を迎えに行かせたのはやはりあの男の策だったのだと汪ワンは合点する。てっきり後方へ護送するのだと思いこんでしまい、まさかモスクワのど真ん中で会うのだとは、想像できなかったが。

「あなたにふさわしいステージを用意したい」

連れの男はドルグシキン相手に緊張する様子もなく、自らのペースで話しはじめる。

「このまま啓示軍オフエンバーレナがモスクワを去ったとして、七月には中央議会の改選……。戦災による欠員の補選すらままならずにいる議会が、新しくスタートを切ることになる。しかし、領土奪還レコンキスタは道半ば。

啓示軍オフエンバーレナ占領下の亜連構成主体では正当な選挙や政治決定が不可能であるのはもちろん、このモスクワを取り戻したロシアも、果たしてつつがなく改選議員を決められるものか。昨夏にクレムリンから逃げ出した守旧派と、新秩序を目指すオムスク政庁派、そしてここに残っていたあなたがたとの間で主導権争いが生じるのは避けられない。私はそのように見ているのです」

「大方の予想に異存はない。でも、勝利の確信がある。あなたと取引が必要とは思わない」

「そうでしょうとも。実際、あなたは勝つだろう。なによりあなたにはモスクワの市民がついているし、クレムリンに残されていた数々の機密情報が強力な交渉材料にもなるだろう。中央議会にシンパを一人、二人送り込むのは確定的な未来。――しかし、ここで問いたいのは、それがあなたの獲得しうる最良の結果なのかということです」

「つまり？ 具体的な話をお願いしたいと、申し上げている」

「失敬。では単刀直入に。私は亜細亜連邦の大統領候補としてあなたを推したい」

「それは……。亜細亜連邦の樹立以来、常に空席であった大統領の座を、現実には？」

「先だって、横浜の議会で手続きの足場固めを済ませています。啓示軍オフエンバーレナの強力なリーダーシップに



対抗するにはこちらも同様の体制が必要だという点は、皆、否定ができないのです。問題は誰を据えるかという利害の調整。その点、貴方は身命を賭してモスクワの街と市民を守ったという実績があるうえに、特定の派閥の擁護を受けてきたわけでもなく、極めて中立的だ」

「クレムリンから逃げた老人たちも、<sup>セヴェルメドヴェーチ</sup>北熊も、そう思っていない。取引の宛てが？」

「取引の必要もありません。フレームワークを変えるだけのことです。ロシア連邦という幻影を継承しようとするから、争いが絶えない。しかし実のところ、ロシア連邦という幻影はもはや必要がない。それが軛に過ぎなかったのだと、この一年をモスクワで過ごしたあなた方はご存知でしょう。皆にも気づかせてやればよい。実際、亜細亜連邦の大統領府が機能すれば、もはやロシア連邦と亜細亜連邦との二重行政は不要のはずです」

「構成主体の細分化と旧体制からの独立ドミノを起こす……。都市国家体制を復古させようという壮大な野望ね。野崎托塔、<sup>たくと</sup>噂通りだわ」

<sup>ワン</sup>汪もドルグシキンと同じく感嘆していた。中央議会議員の野崎托塔といえば、たしかにやり手である有名な男であるが、その手腕を詳しく知るわけではなかった。横浜で九天軍に襲われ負傷したとの情報は得ていたが、それで臆することなど全く無く、軍のモスクワ奪還作戦の情報を聞きつけるや否や日本を飛び出したという次第だろう。

では、横浜の騒動は収まったのか。<sup>ワン</sup>汪はその情報をまだ手に入れていない。イルベチェフもマクシムも、後方の日本の状況は把握できていなかった。彼らからは九天軍の攻勢の話もまったく聞かなかった。民間の報道管制どころか、軍のなかでも情報が遮断されている証左である。

「しかし」市長は硬い態度を崩さない。「あなたに何の利が？ 冷静かつ明晰な野崎托塔が、実は古代への回帰を目指すロマンチストだったとは初耳ね」

「古代の共和制に足りなかったものは、通信技術です。離れている者同士を結びつける有効な手段がなく、主義主張よりも血縁と、地縁、そして軍事力の大小の力学で政体が形成されてしまった。しかし、これからは変わる。変則領域の影響を極力排除したネットワーク回線を<sup>オフエンバーレナ</sup>啓示軍はすでに実用化している。これがあれば、市民や経済の志向で結びついた同胞を糾合一定の発言力を得るといふ政治システムが可能になる。古めかしい地政学から解き放たれ、民主主義のあるべき姿に近づく。私はそう信じていますよ。ロマンと言われれば、そうかもしれない。しかしその夢を見ているのは私だけでしょうか、市長？」

「なるほど。あなたは自分の案を述べたように装って、その実、私の本音を引き出そうとしている。違う？」

しばしの沈黙。口にはしないが、ふたりの考えていることを<sup>ワン</sup>汪は察した。<sup>オフエンバーレナ</sup>啓示軍に教化されたモスクワが亜連内で一定の発言力を担保されるのみならず、同様に今後解放されていくであろう東欧国家群をも、モスクワの先例をもとに組み入れていく。そして<sup>オフエンバーレナ</sup>啓示軍の構築した特殊な通信インフラのもとにあったそれら国家群の民意は、すべてドルグシキンの思うように誘導できる。野崎はそんなストーリーを示唆しているのだ。その先にあるのは……。

「この戦争の……、いえ、八月の悪夢以来続くこの混迷の時代の、出口戦略を共有できている。そう考えて良いかしら」

「ご賢察」

「でも、問題がある。これは亜細亜連邦のありかたを大きく揺さぶる問題。創設者である元老院が果たして看過するかしら？ 口実をつけてモスクワの力を削ぐなり、<sup>オフェンバーレナ</sup>啓示軍の技術を密かに押さえようとするのでは？ 不穏分子の掃討、不正の摘発……、アイデアは尽きないでしょう。そこに動機がある限り」

「もしもモスクワが無力で無抵抗な存在なら、そうしたシナリオを最大限警戒するべきでしょう。しかし、あなたと市民はそうではない。――そして、<sup>オフェンバーレナ</sup>啓示軍が残した技術はすでに手に入りつつある。私はその競争優位の源泉を、あらゆる対抗勢力から守るお手伝いができます」

「中央議会にそれほどの私兵組織があるとは、にわかには信じがたい話です。第二、第三の黒龍隊でも創設したのかしら」

汪もそれにはピンと来ない。黒龍隊はたしかに任務優先度 <sup>ダブルエー</sup>AA のおかげでいろいろ無理ができる組織だが、今ここにいるのは江藤のみ、そして精神のほうは留守ときている。他に同様の特権を持つ議会派の組織はない。ただのハッターリではないかと汪は疑う。

「そのあたりは現時点では伏せさせて頂かねばならないが、いずれお目にかけることになるでしょう。あなたには幾多の力を統べる義務と権利がある。幸い、元老院は正しく戦略を策定できる人々です。こちらが力と旗幟を示せば、彼らはこれまでのやりかたでは通用しないことを悟るでしょう。無意味な消耗戦はしない」

合衆国が亜連よりもはるかに少ないダメージで踏みとどまっているから。汪は敢えて言及されなかった前提条件をそのように読み解く。

「つまり、<sup>オフェンバーレナ</sup>啓示軍の遺産を引き継ぐまでの今この時間が、もっとも危険ということね」ドルグシキンもまた、野崎の論理の抜けを指摘することなく、応じる。「あなたも戦場にわざわざ来るとは……。『虎穴に入らずんば虎子を得ず』、そんな言葉がたしか中国にありましたね。いま、なぜだかふと思いましたが」

「さすがに市長は博識でいらっしゃる。それは後漢書にある言葉で、日本でも有名です。たしかに私にはそういったリスクテイクが他人より多いようですが、専売特許というわけでもない。金星也が来ると読んだうで、敢えて召喚に応じたあなたも同じ。そして金星也も、おそらく彼なりに何かのチャンスを掴もうとここへ来たはずです」

そうだ、と汪はスクリーンの陰で首肯する。そして、嫌な予感がした。ここで会話しているふたりは<sup>オフェンバーレナ</sup>啓示軍の特異な通信技術を継ぎ継ぎとしていたが、具体的には、<sup>ザントウア</sup>砂時計による人々の思考への軛のことを唯一のものと思っているだろう。しかし、それは正しくない。全世界思念送話装置 <崑崙> 並びにその端末オルロフが、汪の改良により、さらに優れた代替品としてこれから登場する予定である。その構図を、金星也がヴィオレットヴィカールなりエトガルの身柄なりを手中に収めて知れば、果たしてどうなるか。

――少し、考え過ぎた。

汪は深い領域から思考を引き上げる。何より警戒すべきは汪こそが情報の漏洩元となることだった。江藤の肉体感覚が戻ってきて、スクリーンに隠れる無理な体勢にそろそろ膝や腿が限界を迎えようとしていることに気づく。密談が終わってくれないものかと、焦りが出た。

「もう面会の時間になる。野崎さん、お話をありがとうございます。私はあなたを信頼することにしました。次

にいつお会いできるかはわからないけれど」

「遠からぬうちに。そして私の信頼できる友人たちが常にあなたを扶助することもお約束します。ともに良き未来を」

ふたりが部屋を出て、それぞれ違う方向へ去っていく。

「信頼……」

汪はひとりごちた。それこそが軛の証。しかし。

軛を受けたがゆえに、ダヴィーチェ・ドルグシキンは強い。なにか問題があるのだろうか？

## 五

ひとけ  
人気が無くなったのを入念に確かめたのち、汪は廊下に戻った。おそらく幻覚に違いないのだが、頭痛が増してくるようだった。

ヤナからスナック菓子をもらいながら歩いた道のりを改めて思い出し、汪は医務室に辿り着いた。果たして今もそこは医務室として機能していたが、医療従事者の顔ぶれは入れ替わっている。正確には、汪が見分けたのは顔ではなく、制服や白衣といった彼らの出で立ちのほうだが。

「鎮痛剤がほしい。頭痛がひどい」

返事を待たずに入っていくと、端末の画面を見ながら打ち合わせをしていた数名の医師が、ふりかえる。そのなかの一人を、汪は知っていた。

「篁先生……」

「タカムラだ、江藤少佐。——自分の名前は間違えないようになったか」

「ああ、今は、正しく認識している」

含意は齟齬なく交換されたらしく、<sup>たかむら</sup> 篁 はにやりと笑った。そして同僚らとの打ち合わせを切り上げ、汪を薬品庫へいざなう。汪が二日酔いの薬を出してもらったのもここであった。

「どういうことでしょう、篁医師。啓示軍に協力していたあなたが」

薬品が日差して劣化するのを避けるためか、窓ひとつ無い閉鎖的なその部屋は、内緒話にもうってつけである。汪はさっそく篁の触れたたたくないであろう点を指摘した。

「俺はモスクワ市民とともにある。啓示軍が去り、市民がここに残るというのだから、何も不自然はないだろう。そんなことより、君こそ、違和感はないのか。他人の体で」

さらりと言っただけの医師に、汪は怒りを乗り越えて、脱力する。

「やはり、知っていたわけか」

「すべて検査したと言った」

「言わなかったこともあった。——まだ、何か隠しているのでは？」

「いつだって、医者<sup>がんじがら</sup>は守秘義務で雁字搦めだ」

「ポーカークフェイスもお手の物か。これだから医師というのは信用できないのだ。——単刀直入に聞こう。あなたはオルロフのことを知っているな？」

「知っているよ。クレムリン所蔵の宝石だろう。ルビーだったか」

「ダイヤモンド。それはオルロフという符牒の由来なのだろうが、私が訊ねているのは別だ。実際、

クレムリンに隠されていたが」

「ああ、そっちかね。知らぬ訳ではないが、詳しくもない」

「そこに私の体を取り込まれている。なんとしても取り返したい。そのプロセスはあなたの興味を惹くのではないか？」

篁という男が純粹に市民への奉仕だけでここに留まったとは、汪は信じていなかった。啓示軍オフェンパーレナ基幹部隊からも一目置かれていた彼には、予て別の思惑があったはずだ、と。果たして、相手は乗ってきた。

「交渉のつもりか。だが、できるかな？ 君は隠し事が苦手になっているだろう」

「隠すことなどない。なんならすべて察してくれればいい。私は交換するに十分な価値を提供できると自負している」

「ほう。まずは聞こうか」

「鍵を握っているのは、忌々しいが、江藤少佐だ。この体の持ち主が状況をコントロールしている。オルロフを使って。そんなことがどうやって可能なのか、メカニズムを調べるうえでは、この体と本来の魂とを保存する必要がある。しかし今詰めるべきは、一筋縄ではいかないその調査をどの組織が行うかという点だ。私は、オムスク派とか北熊セヴェルメドヴェーチとか言われる勢力と、密約を結んだ」

この話自体、あとで圧縮されて江藤に伝わってしまうというのが当人の説明だったが、汪はそれも踏まえて作戦を検討済みだった。

「君のストーリーはわかる。北熊セヴェルメドヴェーチがモスクワに諜報員を潜り込ませている、という噂は常にあったし、それらの一部が事実だったからこそ、今回のスマートな進攻が可能だったのだろうな。で、私への提供価値とやらを聞こうか？」

「私のチームには、バルムンクシステムに精通した技術者と、戦略家、管理者、戦術家、諜報員、そして人心掌握に向けた偶像アイドルも揃っている。――ああ、料理と仮装のうまい者も勘定に入れていいだろう。しかし惜しいかな、医療面に長けた者がいない。殊に、ある種のコミュニケーションことに造詣そうけいの深い医師が加わってくれることは喜ばしい。間違いなく、チームの全員が、将来の偉大な組織における各分野の第一人者となる」

「もう少し上手な口説き文句を期待していた。鶏口牛後の故事で、ほいほいついていく歳じゃない」

「鶏などととんでもない。鴻鵠こうこくだよ。私、汪凱威ワンガイウェイこそは、改新者だ。啓示軍オフェンパーレナの作ろうとした秩序、元老院が作りそこなった秩序を、はじめて完全な形で実現するのだから」

汪はそこで息をつく。篁は指で側頭をつつきながらしばし黙考していたが、やがてその指を止めた。「本気でそう信じているのが直接伝わってきて、正直驚いている。君の野望の行く末は、正直なところどうでもいいが、君から得られる臨床データは、今後の役に立つ」

「ご協力頂けるかな？」

「まずは試しで、つきあってもいい。さしあたり、私に何をして欲しい。――ああ、頭痛の薬だったな」

「いや、それだけではなく」汪は仮初の胸板を指す。「家主との交渉材料が必要だ」

「<sup>まるまるごうなな</sup>〇〇五七。意識明瞭。そういえば、クラスタリングのテスト時には眠ってしまったが、今は逆に目が冴えている。処方<sup>ワ</sup>の副次効果かもしれない」

龍王<sup>ロンワン</sup>の機中にて、独白で病状を逐次記録、報告する。それが篁<sup>ワ</sup>に対して汪<sup>ワン</sup>が提供するデータの手始めとなる。吹き込んでいるのはコックピット内蔵の音声入出力装置ではなく、スタンドアロンのICレコーダである。幸い、江藤博照は日頃からその手の道具を愛用していたらしく、汪<sup>ワン</sup>が篁<sup>ワ</sup>に預かった端末に向かってときどきボソボソ喋りながら歩いても、特に不審がる者はいなかった。もっとも、この<sup>エルヴェイクス</sup>RWXの工場には一部の足の早い部隊しか到着していないので、気にするべきは歩哨<sup>ウツ</sup>くらいのもものだったが。問題といえば、篁の私物であるらしいそのレコーダが少々ヤニ臭いことくらいだった。

龍王<sup>ロンワン</sup>のクラスタリング調整はきっかり一時間で終わっていた。正直、そこまでの時間短縮は難しいかと汪<sup>ワン</sup>は思っていたが、江藤博照の顔が利いたものらしい。他の作業の要員も連れてきてなんとか仕事をやっつけた、という雰囲気<sup>ウツ</sup>を汪<sup>ワン</sup>は感じ取った。

さっそくデータを取って来てやろうと嘯<sup>ウツ</sup>き、マニュアルを参照しつつ龍王<sup>ロンワン</sup>を起動してみると、存外<sup>ウツ</sup>に何の支障もなく整備場内で起立、歩行させることができた。以前にシミュレータで受けた訓練の感覚が蘇る。そのときと決定的に異なるのは、汪<sup>ワン</sup>が推論したように、操縦インターフェースに触れた手足<sup>ウツ</sup>が汪<sup>ワン</sup>の意図に応じて円滑に動くことだ。つまり、自意識にのぼらないレベルの脳の活動は、江藤博照自身のものが生きている。

「心身ともに健康。――外に出るぞ」

後半は、外部スピーカに向けた宣言である。整備場の壁には、「黄色いマフラーのおじさん」が爆破してできた大穴がある。勝手にそこから出ていく。

赤の広場まで行ってみることにする。<sup>ヴィヴィ</sup>VVがまだ残されているかもしれない。すでにイルベチェフがレジスタンスを使ってうまく回収していれば、そのまま合流したいところだが、あいにく、居所がわからない。

首尾よくウルゼルらと接触したイルベチェフがその気になれば、市長と一緒にゴリラトゥゲザとマミートゥゲザを連れて行った赤龍隊の行方など容易に調べられるだろう。いずれ直接か間接かでの接触がある。そういう事態に備えて、篁に連絡役としての仕事も依頼してあるが、イルベチェフのほうはそんな医者が連絡役などと知る<sup>よし</sup>由もない。電話なり電子メールの一通なりで発信できればよいのだが、そういった連絡手段の打ち合わせは、していなかった。

――“雲<sup>クラウド</sup>”を使えれば簡単なのだが。いや、待てよ。

汪<sup>ワン</sup>は自分の状態を思い出した。これまで抑制することばかり気をつけてきたが、汪<sup>ワン</sup>の強い思考がオルロフに勝手に撒き散らされてしまうのは、デメリットばかりではない。駄目で元々、やってみる価値があった。

――『叛<sup>バン</sup>它<sup>タロン</sup>龍』の主題歌を！

少し恥ずかしい思いもあるが、あまり具体的な内容を無差別発信できないし、かといって軍の符牒も使えない以上、そこは目をつむった。これで、イルベチェフが受信すれば、所在地を知らせるために『叛<sup>バン</sup>它<sup>タロン</sup>龍』の主題歌を流してくれるはずだ。ラジオ局などで。

なるべく北、騒動のあった地下鉄駅手前に近づいたほうがさらに伝わる可能性は高まる。これまでの経験からそう判断し、汪は龍王を工場敷地外へ踏み出させる。制止の声はかからない。この工場は完全に掌握されたわけではなく、司令部としての体もなしていないのだと汪は確認できた。

深夜ということもあり、道路を歩かせても通行人や車列の問題には行き当たらない。汪はマクシムにつれてこられた道を逆に辿っていく。

途中、ダーリヤと米軍機の交戦のあとか、道路がふさがっていた。踏み越えてもいいのだろうが、龍王が改装でどのような運動性能を身に着けたのか、汪の技術者として興味が刺激された。腰部に配されたスラスターを作動。スタビライザの角度調整は自動制御が順調に機能。

### 嵐に裾をはためかせ

龍王がビルを一山跳び超えて、反対側の路面に着地する。広場となっており、今は無人。

ちょうどいいとばかり、汪は兵装も試してみたくなった。SMITSが用意していた電磁槍「雷紫電」を携行している。マクシムが扱っていたのと同じく、放電端子が一基の、甲型である。その姿は薙刀に似ている。

大上段に構え、振り下ろす。安全装置を解除して、放電もテスト。

### 憎き敵には裁きの雷

——憎い？ 誰が？ たとえ金星也が核を使おうとも、幻滅こそすれ、私は彼を恨みなどしないだろう。

——私はただ、望む未来を掴みたいだけだ。私にふさわしい未来を。

### おお孤独な勇士

——孤独だと？ 私は、もはや孤独ではない。仲間ができたのだ。今は、近くにいないが。

——誰だ、私の心を揺さぶるのは。

汪はようやく覚った。歌が聞こえている。頭の中で。

悪意が世界を覆うとき

必ず彼は現れる

嵐に裾をはためかせ

握る拳に未来を掴む

憎き敵には裁きの雷

唸れ電気死チョッパ

闇の企み絶やすまで

煌めけパンタグラフィック

呼べよ彼の名

パンタロン

## おお孤独な勇士

## パンタロン

目を閉じれば、瞼の裏に少年の姿がありありと映る。

「フィー。フェリクス・セラフィモフ。君か」

少女と見紛った美貌の少年が、<sup>ほほえ</sup>微笑む。

「歌、ちゃんと覚えたんだよ」

「私の声がわかるか？ いや、私が誰か……」

「<sup>ワン</sup>汪大使でしょ。大丈夫、わかるようになった。<sup>イクスツヴァイ</sup>X2、調整されたんだ。これまで白昼夢みたいなものだと思っていたけど」

「なるほど。——いや、論理的には、まだつながっていないが、得心はいった。お互いに交換すべき情報は多いが……。まず、君たちは今、どこにいる？」

「言えないよ。この会話、どこで盗聴されているか、わからないんだもの」

「合理的判断だ。では質問を変えよう。道連れは増えたか？」

「うん？ ちょっと、意味わからないんだけど」

「わかった。君たちは、今、困っているか？」

「ううん、もう困ってはいないよ。むしろ、助けに行くよ」

「私を？ いや、彼のことだな」

「もちろん。あと、落とし物も拾わないと」

「<sup>ヴィヴィ</sup>VV、<sup>ワン</sup>ヴィオレットヴィカールのことだと汪はわかる。<sup>オフエンバーレナ</sup>啓示軍は<sup>ヴィヴィ</sup>VVでの実験を優先してモスクワ撤退を遅らせたのだと、<sup>ワン</sup>エトガルは語った。汪が<sup>ワン</sup>オルロフの思念通信を使って江藤の肉体を動かしているという事象が原因だったと。

「先に君たちの安全を確保したまえ。落とし物は、私が届けよう。その<sup>てはず</sup>手筈は整っているんだ」

「本当？ 嬉しい！ じゃあこっちは一点に集中できるね。あ、二点か」

「二点？」

「うん、ちょっとこれは言わないほうがいいかな。でも、やることはふたつあるんだ。お願い、<sup>ワン</sup>汪大使。みんなで一緒にいたところには絶対に行かないで！」

「それは、つまり……」

ブザーが鳴り響く。

警報音が鳴っている。ディスプレイに投影された警告メッセージを理解するより早く、機体が勝手に動き出す。左側方に数歩動いて、それから跳躍。暗視モードの画像の隅を、何かが横切った。

空中で方向転換し、着地。目まぐるしい加速度変化に<sup>さいな</sup>苛まれ、オルロフの繋いでくれた束の間の<sup>おうせ</sup>逢瀬から現実へと、すっかり思考が引き戻される。

<sup>ロンワン</sup>龍王が勝手にやったものか、肉体に染み付いた江藤の操縦センスが<sup>ワン</sup>汪の意識を刺激することなくそうしたものか、ディスプレイの中央に、ニアミスした何かの姿が捉えられている。一機の機兵。こちらを向いて立っている。

影龍。自動でターゲットを識別するシステムが、そう表示している。確度六〇パーセントと付記されているが、まず、間違いはないだろうと汪は踏む。初回の日撃情報以来、外観が幾度も変更されてきたのだから、一〇〇という数値に至るには、目撃回数の数増しが必要である。六〇という数値は望むべく範囲で十分に高い。

影龍は一見、武器を携行していないように見えるが、左右の前腕の籠手のような部分に格闘用の爪を展開することが、昨今の遭遇情報から明らかになっている。あるいはなんらかの別の武装へ換装しているということも考えられ、危険度を低く判定するのは危険である。

そのように汪が思考する間、数秒は経っていたが、影龍は動かなかった。こちらを探っているのか、攻撃前の準備状態なのか、あるいは交戦の意思がないという表明であるのか……。汪が相手の出方を探りかねているうちに、影龍はさきほどまでの龍王の歩みと同程度の速度で、ゆっくりと距離を詰めてくる。

相対バルムンク反応、レベル B の警告。この距離にしては強い反応だが、サブディスプレイに表示されるその強度分布は均一である。影龍がバルムンク砲の発射態勢に入っているのではなく、機体を包むバルムンクフィールドの強度が、龍やエントゼルトゾルダートなどとは段違いなのだわかる。このフィールド自体が、武器となるのかもしれない。ノイエーターはレーダーの探知波強度を高めて敵レーダーシステムを壊滅される極めてアクティブなバラージジャミングが可能だ。

影龍の BFG にも類似の機能があることを汪は想像したのだった。

影龍は歩みを止めない。

主兵装として雷紫電が選択され、セーフティも解除されていることを汪は確認したが、攻撃に踏み切るべき間合いはなんともわからない。体が勝手に動く、ということも考えられ、汪は意識して、攻撃実行を指示する右手親指の位置を保持する。あわせて、後退して距離を保つ、ということも思い浮かんだが、龍王なり江藤の体なりがその発想を行動に変換するには至らなかった。迷いが、あるのだ。自分の命運を決めるかもしれない行動を、能動的に選ぶことに対して。

相対バルムンク反応、レベル A。影龍の全身がメインディスプレイの表示範囲に収まらなくなる。レティクルの形状変化が、攻撃に適した距離をすでに割り込んだことを知らせている。汪は親指の震えをとどめるように力を込め続けたが、いまや、ボタンを押さないように力を込めているのか、押しそうとして込めているのか、わからなくなっていた。

相対バルムンク反応、消失。

代わって、バルムンクフィールドの共有を知らせるポップアップ表示。続いて、通信チャンネル確立。音声回線オン。制御を割り込まれている。

『聞こえるか、龍王のドライバ』

汪と同年代らしい、男の声。英語。殺気は感じないが、柔和というわけでもない。

「――聞こえている」

唾を飲み込んで喉を湿らせてから、汪はようやく応えた。親指の震えは幾分収まっている。『現状、利害の一致により貴方との交戦意思はない。しかし、さきほどの通信は危険だ。敵に取り込まれる。その機能を使ってはいけない』



「ヴェツファート？ いや、君はいま『敵』と言ったか？」

しばし、沈黙。

『——その声、江藤少佐か？』

「そうだ」

『私だ、ヴォルフガングだ。モスクワに出ていたのか』

相手の警戒が少し緩んだようだったが、<sup>ワン</sup>汪は逆に緊張を増した。江藤の知己との接触はリスクが大きい。

「ご期待とは異なったかな？」

『そのまま日本にいるのか、暖炉の谷に転移したかと考えていた。横浜はどうなったのか、教えてくれないか。こちらでは観測ができていない』

<sup>ワン</sup>汪は逡巡した。応龍隊——自称「フェアバンテ」なる組織は、目的不明のテロリストである。暖炉の谷では黒龍隊の仲介で共同戦線を張ったが、直接のやりとりはなかった。江藤がどこまでこの男や組織のことを知らされているか、また、江藤がどこまでオルロフを巡る秘密に気付き、それを共有していたかは、<sup>ワン</sup>汪の入念な調査でも未だ明らかにできていない。

カスパルは<sup>ワン</sup>汪よりも彼らを知っていた。戦場でのことで、詳しく聞けたわけではないが、どうやら<sup>オフエンバーレナ</sup>啓示軍基幹部隊と浅からぬ因縁があるようだ。<sup>たもと</sup>袂を分かった者同士という印象を受けた。そのあたりもふくめ、これは調査のよい機会でもあるが、しかし、目下の懸案事項を片付けるうえでは協道であり、ここで話し込むことは避けたい。<sup>インロン</sup>影龍が敵対しないというなら幸いであり、適当なタイミングでの情報交換を約して、やり過ごすのが吉……。

<sup>インロン</sup>影龍が、一步を踏み出し、制止するように手を伸ばす。

『危険だ、江藤少佐。その機体の特殊装備なのかわからないが、とにかく、止めるんだ。離散体への不用意なアクセスは、あなたの思惟と精神とを他者から丸見えにしてしまう。そして、そこにつけこみ一方的に精神に干渉することすら、敵には可能だ』

ヴォルフガングは<sup>ワン</sup>汪の思考をかなり正確に捉えたようだった。そもそも、フィーとの対話を感知したからこそこの男は来たのだと、<sup>ワン</sup>汪は思い返す。

この男は自分以上に情報を持っている。その警戒感が、<sup>ロンワン</sup>龍王の操縦サポート機能を何らかのかたちで刺激したようだった。戦闘機動モードのリミッタや副兵装のセーフティが解除されかかっている。まだ、最後のイエス／ノーを選ぶ権利は残されているようだが、これ以上の感情の高まりは、指や視点による操作を待たずしてイエスとして処理されるかもしれない。

<sup>ワン</sup>汪は深呼吸をする。

「——敵とはなんだ、君たちにとって」

即答はない。

『『真の敵は<sup>オフエンバーレナ</sup>啓示軍ではない』。誰かが言っていた。君たちは状況次第で亜連軍とも米軍とも、エデンに属する有象無象のテロリストとも交戦してきた。我々にはその意図が解明できなかったが、<sup>しか</sup>然るに君たちは、組織や金、イデオロギーといった我々の既知の枠組みとは異なるセグメンテーション分析をしているということだろう。君たちにとって、敵とはいったい何者なのか』

『——今のあなたにお伝えすることはできない。システムを遮断し、<sup>ロンワン</sup>龍王から降りてもらえなければ』

「それはできない。私には今、この機体が必要だ」

汪は自分でも意外なことに、申し出を断っていた。ヴォルフガングの言うようにしたあと、相手の情報優位を解消して、再度出方を検討するのが合理的だろう。汪の理性の部分はそう判断していた。しかし、汪の野生の部分は、ヴォルフガングの殺気を感知していた。――この男は龍王を破壊する。汪が従うか否かに拘わらず。

『こちらの意図を察知できるとは。すでに離散体をそこまで使いこなして……』

<いや、違う>

汪の脳裏には言葉の代わりにヴォルフガングの本心らしきものが流れ込んでくる。

<何かがおかしい。これは、サウエル・ワタナベが予言した、変則領域の可能性の発露か。機序は分からないが、この龍王に乗る男は、江藤少佐であって、江藤少佐ではない。誰がこのようなことを……。いずれにせよ、危険だ！>

影龍が両腕を胸の前で交差させたかと思うと、籠手の部分から長い鉤爪が展開。龍王の頭部を狙った斬撃が襲ってくる。

汪は防御を意識した。すると、肩部の擲弾筒から数発の擲弾が発射され、同時に振るった雷紫電が起こした電磁波の乱れで、強制的に起爆させる。指向性のある爆発が、迫り来る影龍だけを包み込む。

斬撃の軌道はずらせたものの、影龍の呐喊を押し留めるには至らなかった。体当たりを食らった恰好で、汪を乗せた龍王はうしろへ弾き飛ばされた。しかし、背中がビルにぶつかる前に、補助推進機の力を借りつつ跳躍している。江藤の反射神経ゆえか、あるいは蓄積された機動パターンゆえか。汪には操縦を意識している余裕がないが、それが功を奏しているようだと思い直し、行動目標の意識に集中する。

三十六計逃げるに如かず。

背を向けて後退する龍王に、影龍が追いつがる。速度では同等……。いや、少し負けていると汪は計算した。

――援軍が来るまで距離を保てるか？

焦りが募るなか、RWXの工場までの距離は確実に詰められている。救援要請の信号弾はすでに打ち上げていたが、発射角が悪かったかもしれない。再度射出する。

余計なことを考えたためか、龍王の走行速度が鈍った。再度集中を図ったが、それに要した数秒は致命的だった。背後から影龍の斬撃が再び迫り来る。そして行く手には一段と高いビルの壁。

影龍に向き直りながら、龍王は残るすべての肩部擲弾を扇状に撃ち放った。無論、ほとんどが外れる。ただ一発が、影龍に切り払う動作を起こさせ、龍王への攻撃をワンテンポ遅らせることに成功する。

その僅かな隙のうちに、龍王は雷紫電を構え直し反攻に出ようとするが、影龍が懐に飛び込むほうが早かった。爪が一閃、雷紫電の柄が枯れ木の枝のように切断される。

――誰かいないのか。イルベチェフ、ダーリヤ、セルゲイ……！

汪は思わず目を閉じた。僅かの勝機も逃さぬためには決してやっつけられないことを、江藤博照自身であれば取らなかったであろう行動を、自らの意思で選択した。汪は暗闇のなかでそのことを自嘲した。

しかし、影龍からの次なる一撃は来なかった。

恐る恐る目を開ける。

眼前に、体当たりで影龍を止めている龍の姿がある。その片腕は欠落しており、影龍がまさに振り払った鉤爪から、放り捨てられたところだった。

『下がれ、江藤！』

マクシム・ペトロフの声。

汪はつばを飲み下して、そのとおりにした。路面を蹴り、さらにビルの壁を足がかりにして、横跳び。その間に、マクシムの龍は残る片腕に抱えた雷紫電で、ガードが甘くなった影龍の脇へと電撃を加えていた。

<潮時か>

機体にダメージを受けたヴォルフガングが、冷静さを取り戻しつつあるのを汪は感じ取った。何やら頭を巡らせ始めているという渦巻きのようなイメージが去来したのもつかの間、その先の思考は、にわかには曖昧模糊として、汪には読み取れなくなっていく。

最後に龍王を一瞥し、影龍は去った。

汪はクラスタリングを外そうとして、腕が操縦桿から離れないのに気づく。どうしたことかと、首を振り向けるのもおぼつかない。

——この感覚は。

またどこかでブザーが鳴っている。

## 八

体を包むぬくもり。

フィーの抱擁だと、汪は思った。腕を回そうとするが、四肢の感覚がない。視覚もない。それでも触覚はたしかに人肌の暖かさを伝えている。そして聴こえてくるのは、歌。

### おお孤独な勇士

#### パンタロン

覚醒し、汪はベッドで寝ている自分を発見した。暗く、見慣れない部屋だが、内装から エルヴェイクス RWX の工場だろうと見当がつく。ブツブツと途切れがちなラジオ放送が、夢うつつに聞いたように、『パンタロン 叛它龍』の主題歌を流していた。主題歌が終わると番組本編が始まったが、じきに、雑音に吞まれてなにも聞き取れなくなる。

「起きたか」

篁医師がカーテン一枚を隔てた向こうに控えていた。耳にイヤホンをつけている。約束の録音を聞いているのだと汪は悟る。

「なんだ、このラジオは」

「バロログの状況把握のための簡易センサ、といったところだ。オフエンバーレナ 啓示軍は BFG を多く整備した

が、それとて湯水のようにあるわけでもないからな。ありあわせのもので何とかする、モスクワ市民の知恵だよ」

「そうではなく、なぜ、『叛<sup>バン</sup>它<sup>タ</sup>龍<sup>ロン</sup>』なんだ？」

篁はイヤホンを片方外し、はじめて曲に気づいた様子で、かぶりをふった。

「知らんよ。普段は、こうではない。——ま、考えてみれば、放送局が通常営業ということもあるまい。支配権を握ろうとしているのが何者であれ、嘘とも真ともしれぬ戦況報道などされてはかなわない。だから、局を制圧して、意味のない楽曲を流しているのかもな」

「それなら、いっそも流さなければいいと思うが」

言いつつ、内心で汪<sup>ワン</sup>は、自らが発信したメッセージがさっそくイルベチェフに届いたのかと期待を膨らませている。音源は同好会——レジスタンスが持っているだろう。間接的にだが、双方向性を手に入れたのだ。

「——話は変わるが、篁先生。あちらの算段はいかがだろうか」

「北<sup>セヴェルメドヴェーチ</sup> 熊との連絡なら、問題ない。いつ返事が来てもいいように、こうして寝ずに仕事をしているんだ」

篁は嫌味たらしく、こめかみを押さえる。

「おそらく、もう少しの辛抱だ。いま、何時かな？」

「じきに夜明けだ。朝食を用意させようか？ ああ、安心しなさい。犬のぶんはもう手配済みだ」

ゴン太。あの狼。汪<sup>ワン</sup>はすっかり忘れていた。もっとも、あのボルシチ泥棒をうわべだけでも飼養してみせるのは、マクシムの不信を回避する手段に過ぎないのだが。

「赤龍隊はどうなったかな」

影龍<sup>インロン</sup>が龍王<sup>ロンワン</sup>を襲ったことで、再度彼らを敵として、追討にかかったかもしれない。そうであれば、目の上のたんこぶがいなくて良いと汪<sup>ワン</sup>は思った。

「機兵部隊のことまで知らんよ。元気なら、自分で見てくるがいい」

「なるほど、それは名案だ。しかし、先生。私が不在の間に北<sup>セヴェルメドヴェーチ</sup> 熊から連絡が来たらどうするのだね。何と言っても優先事項はそちらのほうだ」

「いちいち面倒なやつだな。そうさな、迷子の呼び出し放送でもするさ」

体はしっかり動かせる。会話のうちのボディランゲージでそれを確認していた汪<sup>ワン</sup>は、篁の提案に乗って、機兵部隊の動きを偵察に出た。

まずは整備場の様子を見るのが手っ取り早い。汪<sup>ワン</sup>はマクシムやセルゲイと話した監視室に向かう。あそこがゴン太と汪<sup>ワン</sup>の仮の住処<sup>すみか</sup>となっているので、うろうろしても怪しまれる心配はない。ゴン太をそこで連れ出せば、工場近辺を徒歩で周回するのも良い口実になる。

少し頭が冴えてきた、と汪<sup>ワン</sup>は思う。オルロフが、真の脳を収めた肉体が、近くに来ているのかもしれない。

「おお、江藤」

急に後方から呼び止められ、汪<sup>ワン</sup>はぎくりと立ち止まる。ふりかえると、マクシム・ペトロフが廊下の向こうから迫ってくる。

見つかりたくなかったが、ここは逃げるより三十六計、と汪<sup>ワン</sup>は考えた。なんといっても知略で未

来を切り開こうとしているのが、今の汪凱威<sup>ワンガイウェイ</sup>なのである。古の檀道濟<sup>たんどうせい</sup>將軍が編んだ兵法三十六計を、そう無下にしたものではない。鷹揚<sup>おうよう</sup>に手を挙げて応じる。

マクシムはまっすぐ汪<sup>ワン</sup>を見据えてのしのしと歩いてくると、間近にまで来て、初めて二の句を継いだ。

「体のほうは大事無いようだな。応龍隊の奴ら、市中制圧に協力したと聞いたが、さっそくあのような狼藉<sup>ろうげき</sup>を……。やはりテロリストは信用ならん」

「まったくですな。ひどい目に遭った」

「貴様も、初めて乗る龍王<sup>ロンワン</sup>でなければ、もう少し戦えたのではないか？ クラスタリングでの操縦補助は慣れが必要だ。興味本位で乗るものではない」

そう言って、後頭部をさするのは、電極を差し込まれる感触を思い出しているからだろう。汪<sup>ワン</sup>とてあの感触は決して快適ではなかった。つくばで第三者的に眺めていた頃から、普及段階への課題のひとつとは認識していたが、いざ自分で使ってみたいま、タスクの順位を大幅に書き換える必要を感じている。

「まったく面目ない。助けていただき、感謝しております」

「それで、興味のほうは、何かわかったか？」

ぎくりとしてしまい、ワンテンポ遅れて、汪<sup>ワン</sup>は悟る。マクシムが聞いているのはヴィオレット ヴィカールのことではない。龍王<sup>ロンワン</sup>が核攻撃の手段として運び込まれたのではないかという憶測のほうである。

「まあ、まだなんとも」

「結構。十中八九、貴様の考えすぎだろう。金元帥<sup>キム</sup>がここで核攻撃を行うとは、俺には思えん。——そうだ、元帥のお呼びがかかっている。今向かうところだったのだ。貴様も同道しろ」

「元帥が！」

汪<sup>ワン</sup>は震え上がる。ややこしい事情を押し隠している身で、あの眼光に見据えられるくらいなら、マクシムとサウナでしっぼりやるほうがまだマシである。

三十六計逃げるに如かず。古の將軍への過大評価を嘆いても、時すでに遅い。

亜細亜連邦軍の最高司令官、金星也<sup>キムソンヤ</sup>は、工場長室に隣接する会議室で待ち受けていた。廊下で彼の副官、神巖大尉が立っているのもそれとわかる。

工場長室のほうは、汪<sup>ワン</sup>は一度だけヤナ・シュプリングルに所用があり訪ったことがあるが、こちらの会議室は初めてである。そもそも彼女は工場長室にあまりおらず、ほぼ資料置き場になっていたし、この会議室にしても、おそらくはRWX<sup>エルヴエイクス</sup>以前の所有者たちが主に使っていたものだろうと汪<sup>ワン</sup>は推測していた。それが今、亜細亜連邦軍の最前線司令部として使われている。

神巖が会釈とともにドアを開け、マクシムと汪<sup>ワン</sup>を中へと誘う。

目に飛び込んできたのは、八月の悪夢直後の混乱期に作られたであろう、粗製乱造品の什器類<sup>じゅうき</sup>である。金星也<sup>キムソンヤ</sup>はどの椅子にも掛けることなく、壁の一面に設えられた長大なホワイトボードの前に立ってこちらに背を向けていた。ホワイトボードには多くの図やドイツ語での書き込みがされており、それを眺めている様子である。

すでに数名の部隊長が入室していたが、汪の見越したとおり、北部方面軍の者は見当たらない。見覚えのない者が多いのは、ダーダネルス作戦の折に金元帥が荒っぽい構造改革をやったのけた結果であろうと察する。彼らは一様に、部屋の奥から四分目のところに一元帥に近すぎず、遠すぎない一布陣していた。汪自身は、彼らより三步奥へ進んだところで、元帥の背中に敬礼。マクシムもその隣に立った。こちらは敬礼なし。

「閣下。お揃いです」

神巖が短く告げると、金星也は初めてふりかえり、場を一睨。その様子は『叛它龍』の悪の親玉を想起させる。もちろん、睨まれた側に一様の緊張が走るところまで踏まえての、連想である。一同、敬礼。

「作戦の変更点を伝える」

金星也は常の通り、単刀直入に話題に入った。

「諸君らからも報告が上がっているように、市中に多数『砂時計』が配置されている。啓示軍が消滅砲や大規模な変則領域操作を行う際に必ず使用しているが、このモスクワにおいては特に数が多い。推定総数は百以上。これらを探索し、発見次第、すべて破壊せよ。期限は一両日中。市民および米軍が『砂時計』の保存を主張し、我々を妨害する可能性があるが、排除して良い。情報部に、啓示軍のマインドコントロールに囚われたものとして処理させる。諸君らが専従すべきは探索と破壊の効率化である。市内制圧および啓示軍追撃は、ここにいない者たちに当たらせる」「応龍隊への対応は？」マクシムが物怖じなく声を上げる。「奴らは、地下鉄の駅を破壊して回っております。啓示軍への追撃の支障となるばかりでなく、これを放置すれば市民の悪感情にもつながりかねないと思わしますが」

「捨て置け。彼奴らが地下鉄駅を襲うのは、そこに『砂時計』があるからだ。本件についての利害は一致する」

「裏は取れているのですか」

「神巖に確認をさせた」

幾人かが、背後の神巖をふりかえるなか、当人が短く答える。

「妥当な分析かと」

マクシムは神巖の一言で引き下がるかに見えたが、思い直したようにまた口を開く。

「それでも、市民感情は疎かにできません。我々は絶対的に少数勢力です。市中に残る啓示軍の諜報員が、市民を焼き付け、作戦妨害や基地襲撃に動員するやもしれません」

啓示軍にその気はない、と弁明したくなる気持ちを抑えて、汪は逡巡する。状況をいかに自分に都合よく持っていか。

砂時計が、市民の思考に影響を与える装置であるのは、まず間違いない。市中に乗り込んだ連合軍をその支配から守るためであれば、有効な手だろう。しかし、すでに長期間その影響下にあった市民たちを元に戻すことは、一朝一夕にいかない。元帥の言うように、短期集中で虱潰しに破壊してまわるリソースを割くのは賢明と思えない。ただし、そうなれば汪に好都合ではある。追撃のリソースが減るぶん、ウルゼルやフィーたちの脱出可能性は高まるし、汪自身も、自由に行動する名目を得る。

マクシムの反論を封じたほうがよい、との結論は出たものの、江藤博照らしい口上の糸口が見つからない。考えあぐねて視線を泳がせた汪は、さきほど金星也の眺めていた板書に引きつけられた。

それこそ、砂時計の機能を説明するものだった。かなり断定的に記述されている。神巖の分析、という感じではない。筆跡が違う。神巖のものではないが、見たことがある。

不意に思い出されるスナック菓子の味。

ヤナ・シュプリングルの字だった。内容も、彼女なら知っていておかしくない。工場長室の隣室なのだから、彼女が何らかのレクをここで行ったとも一瞬考えたが、すぐに違うとわかった。板書には、砂時計が連合軍に与える脅威と、その排除方法について、連合軍側に情報提供するかたちで記述されているのだ。

「マクシム殿。『砂時計』の詳細な情報は、そこに書かれてあるように、この工場の技術スタッフからもたらされたものでしょう。つまり、市民は解放軍であるこちらに味方している。さらに元帥閣下は、モスクワ市長のドルグシキンともお会いになっているようだ。万が一、『砂時計』の破壊が市民に不審を与えたとしても、こちらには大義名分を通す手段が……」

「詮索はよい」

金星也が汪を遮る。

「市民の反抗の可能性があるからこそ、徹底的に破壊する」金星也の答えは揺るがない。「民衆を繋ぐネットワークを破壊してしまえば、恐るるに足らん」

「賛同であります」汪は懲りることなく開口する。「聞くところでは我が軍も、前のモスクワ戦で電磁パルス障害で電子機器のほとんどを破壊され、彼我戦力差どころか味方の配置もわからないまま撤退を余儀なくされたとか。ネットワーク遮断の有効性は、証明されておりますな」

核弾頭を使った疑惑について仄めかす。いかにも江藤博照らしくうと、汪は口角を上げる。見かねたマクシムがつま先を踏んでくるが、涼しい顔を保っていらられる。啓示軍の安全靴はしっかりしているし、よしんばここで元帥の機嫌を損ねたとしても、汪凱威の名に傷がつくこともない。「そういうことだ。よって、優先任務として命じている。――搜索範囲の分担と『砂時計』に関する技術情報をまとめさせている。ディスクを神巖から受け取れ。細部の調整は各員に任せるが、不都合が出れば儂に上げよ」

口々に了解の返答をすると、速やかにその場は解散となる。金元帥が二度も優先事項と言っただから遅滞は許されない。汪も黒龍隊隊長の素振りで神巖大尉に連なる行列に加わろうとしたが、元帥に呼び止められた。

「江藤少佐はここに残れ」

――駄目だったか。

マクシム以下一同は、黒龍隊隊長が単身ここに紛れていることを内心不思議に思っているに違はなく、金星也の特命であればさもありなんとばかりに、納得顔で退室していく。

やがて配布を終えた神巖がドアを閉めると、部屋には金星也、汪、神巖の三人だけとなった。

どうしてモスクワにいたのか、あるいは、日本の関東地方で起こった動乱の委細は、といった質問なら、汪はすでにシミュレート済みである。江藤博照と九天軍の動きはおおむね把握できている。――横浜上空に〈崑崙〉と思しき巨大な岩塊が出現し、崩壊していくところまでは。しかし、その後

がわからない。参謀本部に上がった各所からの報告、情報部の調査結果を得ているであろう金星也キムソンヤに、適当なごまかしは通用しない。おとなしく、時空転移を経験した点だけは白状してしまおうと汪ワンは決めていた。

金星也キムソンヤは手近な椅子に腰掛けると、足を組みながら、再び板書に目をやる。そしてこう言った。「『砂時計』の破壊に反対するかと思いきや、意外だったぞ、汪凱威ワンガイウェイ」

汪ワンは己の手を見直す。やはり熊のような分厚い手のままである。いつの間にか元の姿に戻っていたわけではない。

「元帥、お疲れではないですか。私は江藤博照です」

「笑止。貴様がオルロフを介して江藤の肉体を動かしていることは、承知している。無駄は省け」

「――失礼致しました、閣下。確かに私は汪凱威ワンガイウェイです」

汪ワンは頭を垂れるしかない。砂時計ザントウアの脅威を正しく認識したばかりでなく、汪ワンの身に起こったことすら察知しているとは。

しかし、さすがに推論だけでわかるべくもない。通報者として、工場に入り込んでいる篁の顔が頭に浮かぶ。その他にも可能性はありと汪ワンは思索を巡らせかけるが、思いとどまった。金星也キムソンヤや神巖のまえで考えが漏れるのは好ましくない。

「オルロフの使う通信網は、『砂時計』に依拠していない。そう判断する根拠があったか」

「はっ。あるいは啓示軍オフエンバーレナは、『砂時計』を介してしかオルロフを制御しきれぬのかもしれませんが、こと私の置かれている環境にとって、『砂時計』は不要とわかりました。しかし、元帥こそ、この好機を逃さず技術を得ようとなされるものかと愚考しておりましたので、さきほどの命令には驚きました」

「啓示軍オフエンバーレナのバルムンクシステムはこれまでも多くを接收し、利用を試みてきたが、元老院なり軍事委員会が望んだことを儂は差配したのみ。――ただ、あのオルロフについては別だ。暖炉の谷での不可解な同士討ち、黒龍隊の足取りの不連続性など、軍の統帥と運用に根本的な影響を与えてきた。それは儂が貴様に命じた調査でも立証されている。軍の機能そのものを危ぶめる存在を、儂は許容しない。元老院の思惑がどうであろうと、だ。オルロフと、その子機と目される『砂時計』はすべて、見つけしだい破壊する。随行しているSMITSスミッツにも邪魔はさせぬ」

「お待ち下さい、閣下。オルロフを手元においても、この私の置かれた状態を復旧するには、研究の時間を要します」

「破壊に例外はない。しかし期限については考慮してもよい」

「『砂時計』を破壊し尽くす前に、私自ら、見つけてみせます。手は打っておりますので、幾ばくかのご支援を賜れば、たやすいことでございます」

「何が必要だ」

「啓示軍オフエンバーレナの投棄した機兵、ヴィオレットヴィカールを探して頂きたいのです。すみれ色の装飾で特定できます。友軍がすでに鹵獲しているかもしれませんが、こちらには見当たらず」

汪ワン大尉ワン神巖が発言する。「そのヴィオレットヴィカールを使うと、『砂時計』やオルロフの位置がわかるのですか？」

「その通り。私は啓示軍オフエンバーレナに潜入し、その機兵を奪う算段だったが、戦闘が始まってしまったために



ヴィオレットヴィカールを逃してしまった。そして、赤の広場の戦闘で擱座したようなのだが、現在、所在の確認が取れていない」

「よかろう」<sup>キム</sup>金がうなずく。「しかし、<sup>ワンガイウエイ</sup>汪凱威。そのまえにひとつ確かめておきたい。貴様は<sup>オフエンバーレナ</sup>啓示軍の精神操作を受けていないと言い切れるか？」

「それは……。私が狂っているように見えますか？」

「愚問だ。暖炉の谷で同士討ちを行った将兵も、これまでに奪還した都市の住民たちも、狂っているようには見えなかった。僕はそれをこの街でも確かめてきた。<sup>オフエンバーレナ</sup>啓示軍は操作対象の人間に悟らせることなく理想的なマインドコントロールを施している」

「おそれながら、ご賢察のとおりと小官も考えております。故に、これは悪魔の証明です。『砂時計』を破壊しようとする意志だけが、敵の操作を少なくとも完全には受けていないという、砂上の楼閣が如く脆き<sup>もろ</sup>拠り所でございます」

「――参謀本部の分析も同じだった。しかし、異なる結論に至る分析もまた存在した。やむをえまい、信頼できる環境で観測したデータが少なすぎるのだ。故に、己の目で見て、納得することを僕は選んだ。成果はこれから明らかになる」

「さきほど各部隊長に、『砂時計』を破壊するよう厳命したのは、踏み絵ということでしたか。おみそれいたしました。閣下は『砂時計』で溢れかえったモスクワにありながらも、常のと通りの聡明さと、目的達成の意志をお持ちでございます」

「戯言を。コントロール下にある者どうして何を確かめあっても、証明にはなるまい」<sup>ざれごと</sup>

「左様ですが……。しかし、それでは何故、敢えてモスクワに入るリスクを冒されたのですか。全軍を統帥する閣下が敵の支配下に置かれるようなことがあれば、せっかく覆りつつある戦局も……」

自らが<sup>さら</sup>晒されるリスクを過小評価するというのは、<sup>キムソンヤ</sup>金星也には似つかわしくない態度だと、<sup>ワン</sup>汪は首をかしげる。

「<sup>ワン</sup>汪よ。勘違いをしているようだが、最も恐れるべきリスクとは、目標に対する理想的結果を最大効率で得られないことではない。目標へ向かう途上で破滅的事態に遭遇し、再起や軌道修正の機会を永遠に失うことだ。――まず避けられぬ事態として、僕はいずれ死ぬ。その前提で常に戦略と組織とを更新している。それが明日やも五十年後やも知れぬが、僕が死んでも<sup>たお</sup>亜細亜連邦軍は斃れない。そのように作り変えてきた。もし僕自身が操られたならば、僕が信用し育てた者たちが速やかに僕を処断するであろう。故に、心配には及ばん」

「たしかに万物の命は有限でございますが……」

「成すべきことも為せず、ただ生きながらえることになんの価値があろう。生を受けたる恨みばかりを抱いて死に<sup>ゆ</sup>征くは、げに恐ろしいことよ。然るに、本願成就に<sup>しか</sup>辿り着く期待値をいかに高めうるかこそが肝要。それが、僕が今ここにある理由だ」

自らの命あるうちに見届けず、それで納得できるのか。一度きりの人生の<sup>かい</sup>甲斐を。――その言葉を<sup>ワン</sup>汪は呑み込んだが、<sup>キムソンヤ</sup>金星也が笑ったところを見ると、それは伝わってしまったのかもしれない。

そのとき、汪は己の勘違いに気がついた。突き詰めた合理性ゆえに冷血漢と見られがちなの若き元帥は、その実、誰よりも信頼しているのだ。自分の選り取ってきた行動と、選り抜いてきた人材を。而して、自らその結末を見ずとも、それが必ず果たされると、納得することができる。<sup>キムソンヤ</sup>金星也

は啓示軍オフエンバーレナの操作を受けるまでもなく、もとより信頼を是としていた。

汪ワンは気づけば叩頭こうとうしている。

「閣下ワンガイウェイ。この汪凱威、閣下のお言葉に胸を震わせました。全身全霊をかけ、必ずや使命を果たします。ベルリンまでもお伴いたしましょう」

## 七

汪ワンがヤナ・シュプリングエルと再会したのは、昼前のことだった。

龍王ロンワンでの二度目の搜索から成果なく戻り、汪ワンは煩わしいヘッドギアを脱ぐと、コックピットから抜け出した。ゾルダートシリーズの乗降のほうが快適だったと思いながら。そのときコックピットハッチのそばで待ち構えていたのがヤナだった。口元にビスケットのかすをくっつけて。

「やあ、お疲れ様」

驚いた汪ワンは頭をハッチの裏にぶつけたのち、ネグレイたちが他の整備に集中しているのを確かめて、小声で応じる。

「やはりここに残っていたのか、ヤナ君」

「そりゃ、工場長が工場を見捨てたら、いかんでしょ」

「どういうつもりなのだ、君は。啓示軍オフエンバーレナの機兵製造や整備を手掛けておきながら、連合軍が乗り込んでくれば、勝者にしっぽを振るのか」

砂時計の詳細キムソンヤを金星也ワンにレクチャしたのはやはりヤナ・シュプリングエルに違いない。汪ワンはそう確信し、にじり寄る。

「わあ、怖い怖い。落ち着きなよ。繰り返しだけど、私は工場長だ。工場と従業員を守る責任がある。亜細亜連邦軍に協力することでそれが果たせるなら、迷う理由はないね」

「啓示軍オフエンバーレナと一緒に撤退すればよかっただろう」

「そんな輸送能力、ないよ。それに、道中、包囲軍から襲われかねないしね。——いいや、たとえ退路が確保されていたとしたって、全員が出ていくことはなかっただろうと私は思うよ。ここを気に入ってパートナーを作った連中もいるし、こっちで雇ったモスクワっ子もかなりいる」

「だからといって、砂時計ザントウアのことまで言いふらすのはどういう見なのだ。ウルゼル君たちはまだ逃げ果せていないだろう。やたら搜索をされては、砂時計ザントウアを探すつもりでも、彼女たちが見つかってしまう。イクスツヴァイイクスツヴァイも手負いで……」

「だから、落ち着きなってば。ウルゼルはそのくらいお見通しだろうさ。むしろ、状況をうまく利用するよ。相手の意図がわかっているほうが、作戦は練りやすい」

たしかに、汪ワンもそのように期待をした。論理的には正しいだろう。しかし、感情が処理できていない。信頼を裏切られた気分だった。

オルロフを介したりモコン状態であることを金星也キムソンヤに告げたのも、ヤナかもしれない。汪ワンはその疑いについて問い詰めようとしたが、ネグレイたちが龍王ロンワンの補給と点検のために近づいてくるのを察し、話題を変える。

「この工場、カメラやセンサだらけのようだが、啓示軍オフエンバーレナに情報を漏らしてはいないだろうな」

「もともとは本社とのデータリンクがあったわけだから、それを啓示軍が盗み見る可能性は否定しきれないけど、たぶん今の通信状況じゃ難しいと思う。あんたたちが司令官の命令で砂時計を壊して回っているだろう。砂時計にはだいたい通信のターミナルも併設されているから、いっしょにオジャンになってる」

それはその通りだと汪も思っている。他部隊が順調に砂時計の破壊と市中制圧を進めており、インフラに依存していた民間の通信はままならない状態になりつつある。比較的安定しているのは例の『叛它龍』のラジオ放送ぐらいのもの。イルベチェフは精一杯の仕事をした、というところか。「それらしい話ではあるが、証拠を見せてもらおう」

「お安い御用さ」

小芝居を打って、汪はヤナとふたりきりで電算室に移動した。金星也の警護もここには及ばない。汪は状況をかいつまんで説明し、ウルゼルらの退避先の見当や、ヴィオレットヴィカールの行方について尋ねたが、ヤナは首を横に振った。

「VVは手塩にかけた機体だし、あの子たちを仲間と思う気持ちも変わらない。汪大尉、お役に立てなくて申し訳ないね」

「いや、役には立てる。私に協力してくれるならば、な」

ヤナ・シュプリンゲルの知識と経験があれば、VVに変わるオルロフとの交信装置を組み上げる難度が、かなり低減される。つまり、VV回収をいったん放棄して、ウルゼルたちとの合流を急ぐという選択が可能となる。もちろん、後日所在がわかれば奪還と破壊のいずれかの算段をつけることになるが。

「工場は捨てられない」ヤナは再び首を振る。「百歩譲って、工場はミサイルで吹っ飛んだと思うことにしても、従業員を置き去りにはできない。これ、テストに出るからね、いい加減覚えて」

ヤナの意志が固いことを、ようやく汪は認める。しかし、諦めたわけではなかった。それならば、彼女の条件を満たしてやればいい。その選択肢を汪は手に入れた。金星也の庇護下に入るという道を。

当初は、金星也すら出し抜いて、全世界思念送話装置<崑崙>の運用調整官として世界に名を馳せることを思い描いていた。しかし、金星也がそのような人材信頼主義を取っているならば、汪はその庇護を最大限活用するという戦略もまた有効と考え始めていた。金星也に頭を垂れたのは、決してその場限りの阿諛追従ではない。

注意すべきは、元帥がそのような心の裡を垣間見せたのも、モスクワの砂時計の影響であろうという点だった。各隊が砂時計破壊の仕事をこなせば、じきに元の様子に戻らるだろうと汪は踏んでいる。行動様式を固定させるには短すぎる滞在時間なのだ。汪自身の経験から言えば、数日は砂時計のもとで暮らす必要がある。一方、密命を受けた各隊のはたらきは順調である。金星也が一両日といったのだ。一両日で片がつく。

――しかし。

あの瞬間、ひとつの興味が芽吹いていた。金元帥をもう少し砂時計の影響下に留めたならば、どうなるだろうか。

金星也の他者への信頼は、モスクワ市民のそれとは異なる。信頼主義の行き着く先は一つではな

いという重要な示唆だと汪は考えている。たとえば金星也の信頼主義であれば、互いの決死の覚悟を信頼して、殲滅戦を展開することもありうる。なぜか？ それは金星也の信頼が、己自身への信頼を根源としているからであろう。あくまで自己の正当性を中心に据えるその生き様に、汪は親近感を覚える。危険な賭けであるとわかりつつ惹かれてしまうのは、そのせいかもしれない。

『叛它龍』劇中で汪が最も敬愛するキャラクター、テンガロンと同じだ。

そして、魅力を感じるだけでなく、汪はそれを実行可能なプランとして構築しつつある。砂時計の破壊を遅らせるか、あるいは、すぐに復旧すればいい。この条件を満たすための実行部隊が不足していたが、ヤナ・シュプリングルと彼女の博愛するスタッフたちがいれば、そうした細工は造作もないだろう。ネグレイらSMITSのメンバーが邪魔をしないよう、多少の配慮は要るものの、決定的な課題ではない。やりようはいろいろとある。――ここは戦場なのだから。

汪は意を決した。この奇貨、居くべし。

「ヤナ君、聞いてくれ」

技術系の間人同士とはいえ、ヤナ・シュプリングルと汪凱威の思考や知識のバックボーンはかなり異なっている。汪の集中した深い思考は、彼女にほとんど伝播していなかった。汪はヤナにプランのあらましを伝えるなかでそれを確かめた。

「話はわかるけど、そのリスクを取って、本気で言っているの？ 工場の命運をベットできるほど、まだ汪大尉のことを知らないよ」

ヤナは依然として難渋顔である。

「たしかにそうかもしれない。だが、チャンスを掴んでほしいのだ。残敵掃討が終われば、ここはSMITSなり軍なりに接收されて、機兵やBFGの増産に充てられるだろう。RWXの従業員をいままで通りの待遇で扱う必要もなくなる。だが、私が金星也元帥に掛け合って、ここを啓示軍の技術的資産の保存基地としてもらう。元帥は、SMITSが元老院の指図でさまざまな技術を隠匿している点を良しとしておられない。保全体制がない今としては、破壊を最優先とされているが、課題はいずれ解決するべきものだ。元帥はまだ理解されておられないが、君が構築してきたこの素晴らしい工場ならば、たやすいことだろう？」

「それは、まあね。第四次産業革命を体現しているんだから」

まんざらでもないヤナの反応を見て、汪は手を差し出す。

「交渉成立だ」

ヤナは握手に応じるかに見えたが、直前で、首を傾げた。

「ちょっと待って。少し引っかかるんだけど。――ちょっと言いにくいことなんだけどね。あんた、大丈夫なの？」

「オルロフのことか？ あれは全世界思念送話装置の端末だ。実際、私は日本からモスクワへ直接移動したのだ。ウルゼルたちがベルリンに帰ろうとも、ここの距離が問題を生じることはない。――月まで届くかと問われれば、さらなる検証が必要だろうがね」

「私が気にしているのは安定性。あんた、ときどき意識が途切れるでしょ。リモコン通信の途絶よね。距離が関係ないって言うなら、その発生要件は別に把握できているのよね？」

「それは……」

即座に反駁しようとして、汪は語るべき内容がないことに気づき、愕然とした。

周囲のバログ、BFG 稼働状況、時間帯、神経負荷の程度……。思い浮かぶものがすぐさま棄却されてゆく。残るのは、オルロフの活性化状態と、江藤博照自身の意志に基づく操作。いずれも汪にとっては制御できない因子である。

このように不確かな、危険な状況を、直視せずにいた。

オルロフによる思考の漏洩を恐れたというのはある。大事なことであるからこそ、人前でゆっくりと考えることを避けてきた。しかし、「課題はいずれ解決すべきもの」とは、今しがた自ら発した言葉だった。積み残しに対する意識そのものを忘れてよかったはずがない。

しかし、汪はその意味での恐れを抱かなかった。砂時計によって植え付けられた信頼主義とは、正常性バイアスの強化と表裏一体なのか。それが真だとして、信頼主義のもたらす社会的価値のまえばでは些末なことなのか。――汪はにわか迷いを覚えた。

そのとき、電算室の奥で椅子を動かす音がした。

「誰だ！」

誰もいないと思っていた。非常灯しかついていなかったのだ。

「すまん、脅かしちまったか」

電算機の影から姿を表したのは、セルゲイだった。RWX の作業着に着替えており、どうやらサイズは合っている。

「ここの従業員だったのか？ いや、そんなことより、どこまで聞いていた？」

「一通りな。だいぶトンチキな話だが、疑問が解けた。江藤大尉はあれでけっこう情が深い。まえの任務で俺を見殺しにしたって悔いていたに違いないんだ。それにしちゃ、おまえさんはずいぶん淡泊だった。ペットの世話もろくにしやしないし。――なあ、汪大尉。教えてくれよ。江藤大尉はどこにいる？」

セルゲイは何かを押し殺したような挙措でゆっくりと近づいてくる。汪は護身の武器が欲しくなったが、拳銃は持ち歩かない主義で、今もそうである。ナイフで戦うような訓練は受けていない。そこらの椅子を投げつける腕力すらも少々心許ない。頼れるのはセルゲイに劣らぬヤナの体格くらいだが、果たして彼女が助けてくれるのかは、まだ定かでない。ヤナの様子を窺いたい気持ちもあるが、いまセルゲイから目をそらすのは危険だと、汪は直感していた。

「わからない。私が聞きたいくらいだ」

「じゃあ、そのオルロフってやつは？ 名前の通りクレムリンの宝物庫にあるのか？」

「そのようなところだったが、啓示軍が戦闘のなかで持ち出した」

「なるほど、ダーリヤが依頼してきたのはその件か。ということは、あのイルベチェフも、

北熊もグルってことだな。奴らを信頼していいかはちょっと考えものだぞ」

「さあ。言う必要はないな」

「警戒するなよ。おまえさんとは共通の利害があると思って、話しているんだ。俺は本物のあの人と話がしたい。急にリモコンが切れて、あの人の魂がそのまま体に戻ってこないなんてことがあっちゃ、困るんだ」

汪の眼前にまで到達したセルゲイが、ゆっくりと汪の――江頭博照の肩を叩く。眼差しの焦点は、汪の瞳の更に奥、オルロフが空間を跨いで繋ぐネットワークの向こうを覗こうとしている。

汪はふと、“雲”が見せたであろう夢の光景を思い出していた。エトガルを呼ぶフィーの瞳。そして、龍王の機上で聞いた最後の言葉。

――みんなで一緒にいたところには絶対に行かないで！

なぜ、忘れていたのか。汪の疑問はやがて戦慄に変わる。江藤の意思により記憶を封印されているかもしれない、と。

「お、大丈夫か？ さっそく通信障害か？」

セルゲイとヤナが交互に指先でつついてくるのを、汪は振り払った。

「X2 が来る。おそらく、すでに向かってきている」

「どういうこと？」ヤナが尋ねる。「投降してくるってこと？ それとも……」

「いいや、反撃だ」

## 九

汪は再び龍王に乗り込む。クラスタリングの電極が頭皮を刺す感触を、自分の肌ではないのだと意識して、シャットアウト。

システムの起動を待つ間、汪は神巖大尉に X2 の襲来予告を届けに行った際の会話を思い起こす。

「想定範囲です」神巖は常の落ち着きを微塵も崩さなかった。「速やかに予定の対応に着手します」

「これは私のアイデアだが、ドルグシキン<sup>みじん</sup>を盾にしてはどうだ？ 啓示軍<sup>オフェンバーレナ</sup>は追撃を遅らせるために、モスクワ市民の好意を保持し、我々をここに長く足止めしたいはずだ。よって、市長を盾にすれば、敵は攻撃をためらうだろう。赤龍隊が戻るまでの時間稼ぎにはなる」

「名案ですね。情報部への移籍をお考えですか？」

端からそのつもりなのだ<sup>はな</sup>と汪は悟った。

「もうひとつ耳に入れておきたい。昨夜、野崎托塔が来ていたぞ。ドルグシキンとふたりでこそこそ何か話していた。障害にならなければよいが」

「ご忠告ありがとうございます。含み置きます」

それ以上は対応の邪魔だろうと踵<sup>きびす</sup>を返した汪に、神巖はこう告げた。

「私からも情報提供です。あなたの探し物ですが、依然、見つかりません。何者かが隠匿していると見るべきでしょう」

「SMITS<sup>スミッツ</sup>が？」

「モスクワ入りのチームに、そのリソースはありません。疑わしいのは応龍隊か、あるいはレジスタンスか」

「それは首肯し難い。応龍隊はあれを即座に破壊しようとしていた。そしてレジスタンスが収容していたなら、私に連絡があるはずなのだが……」

喋りすぎたか、と汪が思考を止めたときには、神巖は工場の内線で通話を始めていた。

レジスタンスからイルベチェフ、そして篁医師へ。情報を断ち切ったのは誰か。

皆怪しいといえば怪しく、そもそも、<sup>ザントウア</sup>砂時計の軛を受けていればこそ、特に理由もなく信頼できたのだろう。冷静に顧みれば、このラインに依拠する作戦自体を見直すべきだった。

イルベチェフは、一般市民どころか同好会まで啓示軍に籠絡されていると、気がついていただろうか。あの男は本来、同好会と連携して敵守備を攪乱し、連合軍がモスクワ突入に踏み切る端緒を作る予定だった。それを実行に移さず、ずるずると潜伏したままになっていたということは、きっと、薄々はわかっていたのだろう。ダーリヤたちの抗う相手がもはや啓示軍ではなく、米軍だけでもなく、自分たちを捨てていった亜細亜連邦軍に変わっているということ。昨年モスクワ防衛戦にて亜連軍が苦し紛れで同胞の残る市中に核攻撃をしたというセルゲイの話も事実とすれば、少なくとも同好会が事実と認識している限りは、動機を強化する。

わかっているながら、イルベチェフは、<sup>ワン</sup>汪との策謀にも乗った。交渉相手となる同好会との関係を保ちつつ、<sup>セヴェルメドヴェーチ</sup>北熊の技術的優位を得られるという思惑だったかもしれない。ただ一方で、別の、より野心的な策謀という可能性もある。市中に汪と同等時間潜伏していたイルベチェフ自身が、軛によって目指すところを変えたとすれば、勢力図は違って見えるだろう。劣勢になりつつある啓示軍と、元老院や金星也の統帥権に対して挽回の手が出ない<sup>ワン</sup>北熊。このモスクワの地で両者の連合が成れば、形勢は逆転できる、と。

――啓示軍は、<sup>オフエンバーレナ</sup>北部方面軍が圧力をかけているはずの北面から反撃してきた。

――エトガルが治療され<sup>かくま</sup>匿われている場所を、汪は知らされていない。

――イルベチェフからは、<sup>バンタロン</sup>『叛它龍』の主題歌放送のほかに、連絡がない。そもそも、<sup>ワン</sup>放送が汪の呼びかけに応じたものという確証すらない。

疑惑を支持する材料がここまである。しかし、邪推かもしれない。ひとたび汪が<sup>ワン</sup>「北熊謀反」と広めれば、幻が実体を持ちかねない。イルベチェフの信頼を裏切ることもなる。

クラスタリングを接続していると、思考も整理されるような感覚がある。

改めて考えれば、やはり<sup>セヴェルメドヴェーチ</sup>北熊を無条件に仲間と捉えることには論理性が伴わない。彼らについて最も信頼できることは、彼らの行動原理である。自らの矜持と権益の拡大。それがすべて。<sup>ワン</sup>汪が<sup>キムソンヤ</sup>金星也の庇護下で事を進めようとするなら、乗っては来ないだろう。それどころか、計画を横取りしようとしてくるはずだ。たとえば、汪と主要スタッフを誘拐するということが考えられる。実際、すでにエトガルの身柄は<sup>セヴェルメドヴェーチ</sup>北熊が押さえた状態にある。イルベチェフがそうした。

イルベチェフのことは切らざるを得ない。フィーを投降させ、さらに、エトガルを奪還する。もちろん、自らの心身分離も解消しなくてはならない。やるが増えた。

溜息をついたところで、<sup>ロンワン</sup>龍王の起動シークエンスが完了する。充電、燃料、弾薬ともに完全。物資に関しては<sup>スミッツ</sup>SMITSの専有リソースのおかげ、時間に関してはヤナの指示を受けた<sup>エルヴェイクス</sup>RWX 従業員が、ネグルイらに工場設備の利用方法をレクチャしていたおかげだろう。

近辺の警戒管制車からの情報連結で、敵性勢力の動きをチェック。サマリに拳がっているのは、歩兵レベルの小競り合いを示すものばかりだったが、更新ボタンを押すと、<sup>オフエンバーレナ</sup>にわかに啓示軍機兵戦隊による反攻情報が複数ヒットした。十数分以内に、すべてモスクワ北側で、立て続けに報告が上がっ

ている。ざっと目を走らせると、それぞれが別個の情報であり、計画的反攻であることがわかる。

<sup>イクスツヴァイ</sup>X2、あるいは<sup>エーフェンフ</sup>E5と思しき記述を探すが、あの柄の悪い<sup>エーツヴェルフ</sup>E12が機兵の機種から同定されているくらいで、他に固有の機兵や部隊に関する情報は無い。情報更新を行うとさらに件数が数倍に増えたが、抽出結果は同じ。ノイエトターがいたならばその識別しやすさと脅威度の高さから真っ先に記載されるはずで、<sup>エーツヴェルフ</sup>E12たちの動きは、陽動と取れる。

<sup>イクスツヴァイ</sup>X2ならば十中八九、飛行してくるに違いなく、<sup>ワン</sup>汪はレーダー情報を参照した。文字化される前のリアルタイムに近い情報でもあり、期待をしたが、こちらも反応は友軍機のみ。

受動でだめなら、能動がある。<sup>ワン</sup>汪は精神を研ぎ澄ます。

――フィー。来るというのなら、私のところへ真っ直ぐに来てくれ。話をしたい。

江藤の体を使った“<sup>クラウド</sup>雲”の動作は、<sup>ヴィヴィ</sup>VVで行うのとは違ってなんらの実験的裏付けもなければ、モニタもできない。ただ、相手の応答を得られるかのみである。<sup>ワン</sup>汪は祈る気持ちで待った。

<オーケー、そうするね>

返事は案外にすぐ届いた。まるですぐ近くにフィーが立っているようである。

突如、相対バルムンク反応がレベルAに急上昇する。電波を使っていた情報連結が断絶。<sup>ロンワン</sup>龍王と整備場の扉との間のスペースに、光の渦が湧き起こっている。

「時空転移だと……。まさか、フィー君！」

ひときわ強い光が放たれ、<sup>くら</sup>眩んだ目が再び周囲の明暗に適応できたときには、<sup>ロンワン</sup>龍王と正対するノイエトターの姿が眼前にあった。その姿は<sup>ワン</sup>汪の知る<sup>イクスツヴァイ</sup>X2のものから変容しているが、<sup>ワン</sup>汪は、これがフィーであると、<sup>イクスツヴァイ</sup>X2の変身した姿であると確信していた。

新たな姿の<sup>イクスツヴァイ</sup>X2には、三対六枚の青い翼があった。まず一对、肩部エクストラリムは放射状に展開し飛行能力に特化したように見える。二対は新たに具備したもので、一方は脚部を半ば覆うように垂れ下がり、ヴィオレットヴィカールのバルムンクスタビライザとよく似ていた。そして最後の一对は、肩から伸び、頭の後ろにまわって何かを支える形を作っている。そこに収まっている琥珀色の塊は、もはや疑うべくもない、クレムリンで見たオルロフの成れの果て。

「フィー。フェリクス・セラフィモフ。<sup>織天使の子</sup>名が体を<sup>あらわ</sup>顕す、か。<sup>オフエンバーレナ</sup>啓示軍はノイエトターをその形態にするために、君を使っていたわけだ」

<違うよ。セラフィモフの名は自分で選んだんだ。僕を産んだきり、ろくに育てもしなかった親の名じゃなく、自分が望む姿を表現したくて。そして、ようやく僕は、演技じゃない、現実を手に入れたんだ>

声だけのはずが、その微笑みまでも<sup>ワン</sup>汪は見えるかのようなようだった。単に“<sup>クラウド</sup>雲”で繋がっているというだけではないのかもしれない。フィーは<sup>イクスツヴァイ</sup>X2とつながっており、<sup>イクスツヴァイ</sup>X2はオルロフと融合して<sup>イクスツヴァイ</sup>X2セラフとなった。そしてオルロフには<sup>ワン</sup>汪の魂の座が塗り込められたままなのだ。

「<sup>イクスツヴァイ</sup>X2とオルロフを融合させたのは、誰の<sup>しわざ</sup>仕業だね。ウルゼルくんがそのようなことをするとは思えない」

<それも勘違いだよ、<sup>ワン</sup>汪大使。ウルゼルは、自分が本当にやりたいことのためなら、手段を選ばない。僕と同じでね>

「しかし、残念ながらここにエトガルくんはいない」



<わかってる。仕事がふたつあるって、言ったよね？ だから早く済ませたいんだ。金星也キムソンヤを討ち取るのは>

イクスツヴァイ X2 は高音域の旋律を奏でながら変則領域制御を行い、足を宙に浮かせると、滑るように整備場出口へ向かう。

『みんな離れていて、すぐ終わらせるから！』

エルヴェイクス RWX の従業員たちが残っているのに気づいたか、フィーはスピーカ出力で周囲に呼びかける。ネグレイたちが逃げ惑うなか、転んだ逃げ遅れの前ではちゃんと減速している。その様子だけ見れば、ワン 汪の知るフィーに違いないのだが、言動は総体的に、赤の広場のときよりも好戦的になっている。エトガルを取り返すための通過点として金星也襲撃があるのなら、それが心優しき少年を本気にさせたということか。ワン 汪は己がいかに人の心に疎いかを思い知る。

しかし、ワン 汪とて、野望を潰えさせるつもりは毛頭ない。ロンワン 龍王、戦闘モード移行。前進。獣のような足取りで イクスツヴァイ X2 の背中に追いつがる。主兵装選択、格闘。雷紫電は背中のラッチへ。

「捕まえる！」

操縦補助システムに対して ワン 汪は意図を宣言した。ロンワン 龍王の指は、各種兵装を繊細に扱うよりも、それ自体を武器にした格闘戦に重きをおいて設計されている。美しい肌にその爪を立ててはならぬ。

ロンワン 龍王の両手が青い翼のうち一對——ワン 汪にはフィーの後ろ髪が重なって見える——を掴もうとしたところで、翼が炎のように揺らめいて力場が形成され、躯体がふわりと逃げる。

ワン 汪は驚嘆した。

——スタビライザがダイダロスシステムを兼ねている！

<邪魔はしないで>

イクスツヴァイ X2 は半身振り返り、ロンワン 龍王に向かって左手を差し伸べる。その前腕には、つい昨日まで大腿部に据えられていたはずの機関砲の姿があった。

「回避！」

ロンワン 龍王の自動操縦に任せて、射線を避ける。しかし、フィーは整備場内での攻撃をしなかった。

<次は本当に撃つからね>

イクスツヴァイ X2 は整備場を出るやいなや、大きく飛翔。すでに異変を察知していたらしい陸戦隊から火線が浴びせられるが、ノイエーターに対して効果があるとは ワン 汪には思えない。しかし、追跡の目印にはなった。ロンワン 龍王も続いて整備場を出ると、イクスツヴァイ X2 の飛んだ先——工場長室のほう——へと、跳躍する。こちらはおおむね古典力学に則った弾道飛行。

イクスツヴァイ X2 はすでに工場長室のまわりに滞空し、様子を外から窺っている。獲物を追い込んだ猛禽類のように。金星也キムソンヤを見つけたら機関砲を掃射するとの確信から、ワン 汪は慌てて呼びかける。

「フィーくん。ヤナ・シュプリングルがいる。彼女を傷つけないで、早まったことはするな！」

ロンワン 龍王は、いったん X2 を越えて飛び上がり、屋上に着地する。主兵装選択、肩部ロケット弾。

<僕が戻ってくると知っていて、ここに残ったのはヤナの意志。だから、しょうがない。運がなかったら、それまでのことだよ>

「知っていた、だって？ ならば、ヤナくんが亜連軍に工場を使わせていたのは……」

<人の事情まで、知らないよ。僕は任務を果たしてエトガルを取り返すんだ！>

X2<sup>イクスツヴァイ</sup>が両腕から発砲。しかし、狙いを定めたというわけではなく、感情の昂<sup>たか</sup>ぶりがそのような操作として認識されてしまったようだった。複数階層の窓ガラス、コンクリート壁が砕け散り、地上へ降り注ぐ。

フィーは自己実現を果たしたと言ったが、むしろ不安定になっていると汪<sup>ワン</sup>は感じ取った。

「落ち着きたまえ、フィーくん。金星也<sup>キムソンヤ</sup>を殺さなくても、エトガルくんは取り戻せる。私に任せてほしい。彼の好きな研究もしっかり続けられるよう、話はつけてあるのだ。他ならぬ、金星也<sup>キムソンヤ</sup>元帥にね」  
<そんなの、エトガルが本当に望むこととは思えない。ハンスもアルベルトもないところへ行くだなんて。ましてや、敵になるってことでしょ>

「そんな雲の上の男たちに、エトガルの心を奪われていいいいのか。変えさせるんだ、彼の心を。離れていてもきっと同じ雲を見上げてしていると信じあえる、固い絆で結ばれた仲間の力で」

周囲を走査していた X2<sup>イクスツヴァイ</sup>の首の動きが止まる。

<人殺しをしなくても、僕の望む未来が手に入る……>

「そうだ、フィーくん。君だってその機体に乗るよう強制されることもなくなる。踊りでみんなを笑顔にするのが好きなんだろう？」

<僕のなりたかったもの……>

X2<sup>イクスツヴァイ</sup>の三対の翼が縮こまっていく。旋律の音階が下がり、滞空高度も追従して下がり始める。  
——成功だ。

汪<sup>ワン</sup>の口から安堵の溜息が漏れる。

しかし、それは早計だった。

X2<sup>イクスツヴァイ</sup>の後頭部につながったオルロフが、不気味な光を発した。

<戦エ。金星也<sup>キムソンヤ</sup>ヲ殺セ。或レハ相容<sup>ア</sup>レヌ>

突如脳裏に響いたその言葉に、汪<sup>ワン</sup>は総毛立った。いや、言葉だけではない。悪魔が汪<sup>ワン</sup>の肉体を撫でつけているような、そのようなイメージが湧いた。口の中が苦い汁で溢れる。

しかし、いっそう激しい反応を示したのはフィーだった。

X2<sup>イクスツヴァイ</sup>の六枚の翼が再び伸長し、蛇のようにのたうったかと思うと、やがて青い炎に姿を変えた。そのまま全身を包んで、空中の火球となる。フィーの絶叫。

汪<sup>ワン</sup>は目をしばたかせる。

機体は燃えてなどいなかった。燃え盛っているのは、フィーの戦意。“雲<sup>クラウド</sup>”を通じて汪<sup>ワン</sup>はつぶさを感じ取ることができる。

X2<sup>イクスツヴァイ</sup>は静かに、鉛直軸を中心として回転を始めた。やがて下半身の一对の翼がスカートのように広がると、その裾から無数の光条を放つ。工場の建屋に次々と穴が穿たれ、様子を窺っていた歩兵たちが逃げ惑い、あるいは斃<sup>たお</sup>れていく。

「やめろ、君の踊りはそんなものじゃないだろう！」

オルロフを引き剥がせば、もとに戻るのではないか。汪<sup>ワン</sup>は一縷の望みに賭け、屋上から飛び降りる。いつの間にか兵装は雷紫電に切り替わっていた。その矛先を足元—— X2<sup>イクスツヴァイ</sup>のうなじに向け

る。スタン攻撃なら、直撃させてもフィーを殺しはしない。汪<sup>ワン</sup>自身の体を損ねることも。

「釣瓶<sup>つるべ</sup>落とし」

ふと想起した言葉を呟く。

攻撃は失敗した。X2<sup>イクスツヴァイ</sup>は従前の回転を続けたまま瞬く間に倒立し、雷紫電の先をすらりとした脚で蹴飛ばすと、龍王<sup>ロンワン</sup>を抱きとめて、さらに地面へと急速下降で叩きつけたのだ。複数の警告灯が明滅。汪<sup>ワン</sup>は自分が何をされたか理解するのにしばしの時間を要した。

汪<sup>ワン</sup>が体勢を立て直したときには、フィーは建物の向こうに姿を消していた。しかし、強烈な相対バルムンク反応と破壊の音が、その行方を示し続けている。

——金星也<sup>キムソンヤ</sup>を見つけ出して殺すのではなく、存在確率のある程度高い領域をすべて殲滅するつもりなのか。

今しがたの損傷で、メインロケットを使ったブースタージャンプが覚束<sup>おぼつか</sup>なくなった。工場の外へ出るには、穴だらけの建物を迂回しなければならない。複数の死傷者が目に入る。汪<sup>ワン</sup>はヤナやセルゲイ、篁<sup>キムソンヤ</sup>の死体に出くわさないことを祈りつつも、金星也<sup>キムソンヤ</sup>だけは、神巖がしっかり逃しているはずだと確信を抱いていた。

## 十

ラジオが『叛<sup>パン</sup>它<sup>タロン</sup>龍』の歌や宣伝ではなく、シナリオ本編の音声を流している。

怪獣のように暴れ回る X2<sup>イクスツヴァイ</sup>を追いつつ、なかなか友軍が集結してこない状況下で、汪<sup>ワン</sup>は可能な限りの情報を集め次の手立てを練ろうとした。その情報のひとつがラジオであり、汪<sup>ワン</sup>は件<sup>くだん</sup>の放送のちょっとした変化に気づいた。

いま放送が始まったのは、パンタロン<sup>パンタロン</sup>がついに敵対する組織の本拠地<sup>しゅかい</sup>に乗り込み、首魁である「大頭領<sup>あいまみ</sup>」と相見える回だった。当時特に盛り上がった回で、テープに保存して再見できなかった汪<sup>ワン</sup>も、主要なシーンのやりとりをまだ覚えていた。

『見つけたぞ、大頭領！』

ラジオのパンタロン<sup>パンタロン</sup>が吠える。

汪<sup>ワン</sup>はそのとき直感した。誰がこのラジオ番組を流し、何を目的としていたか。

冒頭のタイトルコールの時点で、これを聞くべき者たちはすでに行動を開始していたに違いない。含意はつまり、「ターゲットを見つけたぞ」である。しかし、発信源はどこかの秘密基地であろうから、肝心<sup>キムソンヤ</sup>の金星也の居場所自体は、別の方法で指示する必要がある。

敢えて木々の少ない開けた公園へ出て、汪<sup>ワン</sup>は全周囲を確認した。ノイエーターの電子攪乱を受けなくなり、友軍との情報連結が復活したぶん、そこから届けられる情報に注意が偏ってしまっていた。だから見落としていたのだ。火災の黒煙や粉塵の白煙が溢れ返るなかで一箇所だけ、赤色の狼煙<sup>のろし</sup>が上がっているのを。

そちらに向かう車や工事用の乗備機<sup>じょうようき</sup>がちらほらと見える。徒歩の人間もその数倍。ラジオの合図から数分と短い時間でこれだけ集まってくるというのは驚きだった。『叛<sup>パン</sup>它<sup>タロン</sup>龍』同好会を装ってきたレジスタンスの保有しえた限られた装備で、展開力がそう高いはずはない。だとすると、彼らはそ

れだけ多数、市中に潜伏していたということだ。――実際、昨夜の仮装のままの戦士が、小銃を抱えて橋を通過した。

汪は彼らの抵抗の対象が端から啓示軍ではなかったことによく気がついた。あるいは、ごくごく当初こそそうだったのかもしれないが、とっくの昔に変わってしまっている。砂時計の軛は例外なく作用したということだ。

同好会が啓示軍シンパであったなら、彼らが啓示軍の撤退に帯同せず街へ残った主たる目的は、連合軍のモスクワ制圧を長引かせ、啓示軍の撤退を支援することにあっただろう。連合軍に対しては対啓示軍レジスタンスであると装いつつ、啓示軍の残した物資を差し押さえ――委譲され――、攪乱すべきときを待っていた。そして今、時が訪れたのだ。金星也元帥がこのこと戦場に現れ、北面での啓示軍の反撃も始まった。X2 の状況をどこまで把握しているかは不明だが、やることは同じだ。金星也を抹殺し、亜細亜連邦軍の戦略立案と組織運営に大打撃を与える。なんなら、モスクワから連合軍を追い返し、この一年で新たに得た「安寧」を取り戻すことすら、可能かもしれない。

「全軍へ。レジスタンスは敵性。繰り返す、レジスタンスは敵性。啓示軍と連動し、赤の狼煙に集結している」

バログはほとんど出ていない。この通信で多くの味方が状況を理解するだろうが、果たして間に合うか。

汪も赤の狼煙へと急ぐ。対人榴弾や催涙弾などは装備していないので、生身の同好会員たちは無視して追い越す。乗備機やトラックは蹴飛ばすか、雷紫電でつつき倒した。X2 との立ち回りが控えているのだから、両肩の火器は温存しなければならない。

丁字路を折れたところで、汪は嫌なものに出くわした。

対空自走砲、アルグン。こちらに右側面を向けている。正面に向けられた砲塔はやや俯角となっており、なにか地上の標的を狙っているような態勢である。

「そこのアルグン、ダーリヤくんか」

亜連軍の周波数で呼びかけると、やはり盗聴していたらしく、応答がある。砲塔も一緒にこちらを向く。

『こりゃ驚いた、汪大尉が機兵に乗っちゃうなんて』

「また米軍機でもいじめているのかと思ったが、どうやら、相手を間違えているようだな。すぐに攻撃態勢を解きたまえ」

『いいや、人違いじゃない。こちらは金星也を狙っている』

「下剋上とは、野蛮な」

『このまま進駐が進んだら、こちらは啓示軍とつるがや不穏分子言われて投獄されるに決まっちゃう。――たしかにこちらは啓示軍とうもうやっちゃった。でもな。昔の男がしゃしゃり出て、おんしは不幸せやき助けちゃるって殴り込んできたら、張り倒すがが道理だわ。で、あんたはどっちの味方？』

「仮装行列をともにした仲だ。同好の士を大事にしないわけがない。君たちが恨みを抱くのも理解できる。しかし、だからといって金星也を叩くのは、合理的選択と呼べない」

『御高説はまっぴらごめん』

「おい君、バットゥゲザはテンガロンの言うことを聞くものだ」

『誰がテンガロンじゃち？ その形<sup>なり</sup>で笑わせなさんな』

『おのれ。――しかし、ドルグシキンも事を構えるなど言っていたらう』

『市長か。その市長が帰ってこん。市長の志した無血の解決が潰えたんなら、うちらは次善の策を実行に移すのみ。――ようやった、追い詰めたか！』

アルグンが砲塔を正面に戻し、前進。いったん<sup>ワン</sup>汪からは見えなくなる。

慌てて追い、交差点を曲がると、アルグンのさらに向こう、噴水に乗り上げた亜連軍制式装甲車「BMD-4」の姿があった。足回りに爆弾かロケット弾を受けたような様子で、その周囲を『叛<sup>バン</sup>它<sup>タロン</sup>龍』同好会が取り囲みつつある。

――どうして砲塔を使わないのか。

機関砲を掃射するなり煙幕展開するなり手があるはずだが、乗員不足か、昏倒してしまったのかもしれない。汪はかわりに龍王の煙幕弾を発射しようとするが、そのまえに、BMD-4の側に動きがあった。

後方ハッチから、誰かが出てくる。軍装ではない。目を凝らした汪の意図を察知して、自動でカメラがズームインする。おかげでそれが誰かはすぐにわかった。モスクワ市長ダヴィーチェ・ドルグシキン。そしてもうひとり続いて出てきた大柄の作業服姿の男は、セルゲイ・リー。

「下がれ、おまえたち。ここには市長がいらっしゃるぞ」

『どういうつもりなが、セルゲイ。それにそがに流暢に喋るらあて。マミートゥゲザのロールプレイやったってわけ？』

「俺はおまえたちほどの好き物じゃない。ちょっと具合の悪かったインプラントを調整しただけだ。あんまり興奮すると、また戻っちゃうが。――だからよ、さっさと解散してくれ」

『市長を<sup>ら</sup>拉致しとったがはおんしかい』

「拉致などではない。市長のご意志だ」

「その通り」ドルグシキンがセルゲイを制する。「啓<sup>オフエン</sup>示<sup>バーレナ</sup>軍にも連合軍にも、モスクワから出て行ってもらおう。その交渉を行うために、私は行く。金星<sup>キムソンヤ</sup>也元帥と一緒にだ。もう一度言う。本当にこの街のためを思うなら、あなたたちの力はとっておきなさい。これからこのモスクワを守るのは、他でもない、あなたたちなのだから」

『市長……。そがにうちらを……。信頼してくれちゃったなんて』

ダーリヤが号泣しはじめる。

『みんな、撤収！』

ダーリヤの号令一下、同好会はBMD-4の周囲から離れていく。

<そんなのは、だめ。命令と違う>

突如、思<sup>しい</sup>惟<sup>い</sup>が届く。遅れて、相対バルムンク反応の急上昇による警告音。フィーが来る。

BMD-4のほうへ龍王<sup>ロンワン</sup>を突進させる。本来の主兵装でなければ、龍王<sup>ロンワン</sup>の装甲でもいくらか耐えられる。金星<sup>キムソンヤ</sup>也やドルグシキンを逃がす時間は稼げると汪<sup>ワン</sup>は踏んだ。しかし、ペダルを目一杯踏み込んでも、背部ロケットエンジンを損傷しているために、加速が弱い。

上空に、青い炎をまとった天使が飛来する。

<いつもいつも余計なことばかり！>

フィーの心の叫びとともに、光条が降り注ぐ。それは雲の合間から差す陽の光——天使の梯子はしごに似ている。

間一髪ロンワン、龍王は間に合わなかった。

しかし、他に BMD-4 のもとへ駆け込んだ機兵がいた。影龍インロン、またの名をユプシロン。巨大な楯で、照射されたバルムンク砲を受け止めている。界面は虹色に輝き、龍王のバルムンクフィールドも干渉を受けて乱れる。汪ワンもめまいのような感覚に襲われた。おそらく、オルロフからの遠隔操作にもノイズが生じたのだと推定する。

<オーバーロードか！>

フィーではない思惟。昨夜の男、ヴォルフガングだと汪ワンにはわかる。

影龍インロンが楯を掲げたまま、膝をつく。フィーの X2イクスツヴァイ は地上へ降下し、影龍インロンを蹴り飛ばそうとするが、ここでようやく汪ワンは、止めに入ることができた。龍王の両手が X2イクスツヴァイ の中段の翼一对を掴む。「やめろ、フィーくん。どんな命令を受けたか知らないが、状況は変わった。戦闘が交渉によって終結しようとしているのだ。この街をこれ以上、破壊したくないだろう。武装を解除するんだ」

<状況……変わった……？ いや、命令は……変わらない>

警告音ロンワン。龍王の指先が過熱状態。幻覚ではなく、翼が燃えているのだ。ちょうどフィーの髪と同じ、青白い炎。汪ワンは思わず、龍王を後ずささせた。摺座した影龍インロンにつまずいて、隣に尻餅をつく。

翼の先端に炎が集まり、伸びる。蛇のようにのたうつ炎あぶに炙られて、龍王の表面温度がみるみる上昇していく。汪ワンはコックピットに熱が到達する時間を読みつつ、歯を食いしばった。背後には金星也キンやドルグシキンがいる。BMD-4 はまだ動いていない。要人たちが脱出したのかは、機外のカメラが損傷して、確認不能。

「もう、限界だ」

額の汗を感じながら、汪ワンは誰にともなく呟く。

『下がれ、龍王ロンワン』

聞き慣れない男の声がした。次の瞬間、X2イクスツヴァイ が後ろへ引き倒されている。そして仰向けでゆっくりと引きずられていく。幾本かのワイヤが翼や脚に引っ掛けられているのを、汪ワンは見て取った。そのワイヤの伸びる先に、汪ワンの見知らぬ特殊装備をまとった二機の龍ロンがいた。

通信画面に、どこかで見たような、しかし思い出せない顔が現れる。

『元帥と市長は脱出した。邪魔になる。後退されたし』

顔の上に官姓名が文字で表示されている。姜宗義カンジョニイ大尉。紫龍隊副隊長だ、と汪ワンは思い出す。金星也キンの命で、応龍隊追討を専門としていたはずだが、直近の状況変化を踏まえて神巖が手を打ったらしいと察する。

増援は二機ではなかった。通り沿いのビルの屋上にも、類似の姿の龍ロンがいて、すでに狙撃の態勢を取っている。ほどなく、擲弾を X2イクスツヴァイ に発射。トリモチ弾。命中したそれは、X2イクスツヴァイ の一時的な路面への拘束に成功するが、見ているそばから燃えはじめている。

仲間がいるのは頼もしいが、ノイエーターが数だけでどうにかなる相手でないのは、前のモス

クワの戦いで思い知らされている。

紫龍隊の目的も、時間稼ぎであったろう。姜たちの龍が数十メートル後退。空いた射線に飛び込んできたのは、ミサイルだった。X2 に直撃、爆発。さらに続けて数発。頭上ではジェットエンジンの爆音がしている。見上げると、米軍機バードデーモンと亜連空軍機 Su-44 とがそれぞれ逆方向に旋回し、再攻撃に備えて上昇に転じる様子が垣間見える。

これだけの火力なら、あるいは、暴走中の X2 を撃破できるかもしれない。しかし、それはオルロフの破壊と、フィーの死亡をもたらす危険性が高い。

龍王の強制冷却が追いつき、立ち上がる。  
「汪……ゴホン、龍王から各機へ。野放図な攻撃はエネルギー供給になり、かえって悪手だ。極力控えてくれたまえ。一方で、先程のような拘束は有効だ。敵のエネルギー切れを誘発させたい」  
『了解した』

エネルギー云々は当て推量の域を出ないが、姜たちは汪の指示に従い、換装しようとしていた武装をもとに戻す。上空のバードデーモン、Su-44 に通信が届いたかは不明だったが、追撃は来ない。

X2 はトリモチとワイヤーをすべて焼き切り、立ち上がる。背中のオルロフがさらに機体へ食い込み、さらには、翼の隙間から垣間見える外装も、工場に現れたときから変わっているような印象を受ける。あるいは内部すらもそうかもしれない、そう想像してしまった汪は総毛立つ。

くああ、面倒だな。そうだ、名案がある。みんな静かになってもらおう。僕の邪魔をするもの、僕とエトガルの間を引き裂くものは、永遠に>

X2 の翼の一对が大きく開かれたかと思うと、突風が巻き起こる。機兵たちはよろめき、人や乗用車は吹き飛ばされ、ひっくり返る。青い炎が何筋も放たれ、ビルを穿ち、道路を炙り、街路樹を燃え上がらせる。火だるまになったレジスタンスを同胞が服で叩き、必死に消火しようとしている。

――駄目だ、フィー。こんなことをしては。こんなことをあの子にさせては！

汪は血管の切れる勢いで叫んだつもりだったが、自らの声が聞こえない。耳は聞こえているが、江藤の声帯をコントロールできていないのだとわかる。操縦桿を握る手、フットペダルを踏む足、クラスタリングをかぶった頭……。それらの感覚が急速に遠のいていく。

刹那。重い石棺の蓋が開いたようなイメージが去来する。僅かな隙間の奥に何があるか覗き込もうとして、汪は、その奈落へ落ち込んだ。

## 十一

闇の中、永く続く落下の感覚。それは汪に、先日のモスクワ上空の出来事を想起させる。ただ、息苦しさはない。そもそも空気の存在が感じられない。体の感覚も希薄。

不意に、汪はどこかの地下鉄の駅にいる自分に気づく。砂時計の冷たい筐体に手を添えて、自分を押しつぶしそうな人混みの熱気を紛らわそうとしている。周りは撤退する啓示軍将兵とその身寄りで埋め尽くされており、負傷者も少なくない。親とはぐれたらしい子供が泣いている。

次の瞬間、汪は戦闘機のコックピットに座っている。IFF が味方と示している機体からの先制攻撃を受け、呼びかけに応答はなく、やむを得ず反撃に移るところだ。ロックオンしたのは、Su-42。

——ルテナアにかなうものか、第二戦略機動師団の亡霊め！

誰かの心の叫び。

汪<sup>ワン</sup>があたりを見回すように意識すると、景色はまた変わり、暗い地下室になっている。戦闘の音を遠雷のように聞きながら、今のうちにと、くすねてきた糧食を頬張っている。

——ドンパチはもうごめんだよ。

啜るコーヒーはまずい。鉄のような味がする。これは血だ、と汪<sup>ワン</sup>は気づく。いつの間にか屋外におり、腹には金属片が深々と突き刺さり、頭上には丹塗りの機兵が立っている。機兵の足が振り上げられ、そして視界がそれでいっぱいになり……。

——嫌だ、まだ生きたい！

思わずつぶった目を開けると、汪<sup>ワン</sup>は母の胸に抱かれ、不安げな顔を見上げている。にわかにか空腹を覚え、泣き出す。

——おっぱいちょうだい。

涙が止まらない。昨年から勤めはじめた工場で出会い、やがて最愛の相手となった男が、瓦礫<sup>がれき</sup>に頭を割られて絶命している。工場長が力づくで引き離そうとするが、作業着の上着を脱ぎ捨てて逃れる。すがりついた男の手の指には、ふたりで買ったばかりの婚約指輪が輝いている。

——返して。わたしの愛する人を返して。この人なしで、生き残る意味なんてないのに。

オルロフが共有する、人々の想い。

汪<sup>ワン</sup>の意思など構わず送りつけられ、返信など受けつけない、一方的な通信システム。

果たして、見せられているのは現実か、妄想か。あるいは誰かの恣意的<sup>しゐ</sup>な意図に歪められた世界か。

悪意が世界を覆うとき  
必ず彼は現れる  
嵐に裾をはためかせ  
握る拳に未来を掴む  
憎き敵には裁きの雷  
唸れ電気死チョッパ  
闇の企み絶やすまで  
煌めけパンタグラフィック  
呼べよ彼の名  
パンタロン  
おお孤独な勇士  
パンタロン

『<sup>パンタロン</sup>叛它龍』の主題歌に引き寄せられ、汪<sup>ワン</sup>は再び闇の世界を落下していく。歌は繰り返され、それにつれて受信感度が高まっていく。

やがてどこかへ尻もちをついて、汪<sup>ワン</sup>は止まった。落下時間からついつい計算してしまったほどの衝撃はなく、単に、急に変位が止まった、という感覚。



ドレス姿の背中が眼前にある。歌い手はフィー、フェリクス・セラフィモフであった。

フィーの肩はまるで発作を起こしたように震えている。汪はそれを止めたくて、両手を差し伸べた。動く手は存在している。ゴリラトッゲザではなくテンガロンの仮装に相応しい手が。包み込むように抱きかかえる。

〈大丈夫だ。私がついている〉

〈汪大使！ ——僕は、何をしているの？ エトガルに会いたい。でもそのためにダヴィーチェやみんなを傷つけて、殺していいなんて思ってない！ 僕はみんなの笑顔が好きなのに。こんなのはおかしい。僕の中に僕じゃない誰かがいるみたい〉

〈違うよ、フィーくん。それはおそらく、君自身だ。普段、意識していないだけの、君の裏側〉

〈この化け物が僕だって言うの！？〉

汪の腕を振りほどき、振り返ったフィーの顔は、銀のおしろいと青や黒の隈取くまどりに彩られている。京劇に出てくる妖怪の面。汪は遠き日の母との観劇の記憶が混入しているのだと気づく。

〈そうだ。人は誰も表に出さない裏を抱えて生きている。だから京劇は一瞬で変面するのだ。しかし、現実はそのほど劇的ではない。己の裏側を自覚しないまま、何かがすっきりしないという思いを抱えて墓へ入る者すらいるだろう。己の本当の姿を知るといのは、むしろ、偉人にのみ可能な所業だろう〉

〈僕は偉人になりたかったわけじゃない。ただエトガルやみんなと楽しく生きていただけなのに〉

〈偉人とは、なろうとしてなるものではない。無数の困難をはねのけて、なお何かを求め続けるうちに、偉人になるのだ。まだ、君にはわからないだろうが〉

〈そうか、汪大使は偉人になろうとしていたんだね〉

フィーの手が、汪の頬ほに触れる。しかし、直接の感触はない。何かの手が感触を遮っている。

面だ。

汪はそのかたちを触って確かめる。凹凸が多いのは鬼面の類か。ぎょろりと大きな目玉がある。そしてひときわ特徴的なのは、拳ほども突き出た、棒のように長い鼻。

〈迦楼羅天……いや、天狗か。高慢の象徴とも言われる。他ならぬ私が、目的をおごなりに偉人への憧れを追っていた、ということか。それでは紛い物にしかなれないと、本当は知っていたながら〉

〈僕たちは間違ってしまったんだね。でも、どうすればいいんだろう。教えてよ、汪大使〉

〈よろしい。ただひとつ訂正が必要だ。私はともかく、君は間違っただけではない。これはオルロフのせいだ。偉人になる準備いかんの如何を問わず、オルロフが無遠慮に人の外側と内側とを繋いでしまった。まったく、最低限のマナーもわきまえない、原始的なコミュニケーターだ。——しかし、道具は使しようと言うだろう？ この汪凱威ワンガイウエイに運用を任せたまえ〉

汪は気づいていた。本来、“雲”クラウドは双方向通信を確立していない。にも拘わらず、フィーと汪ばかりが度重なる交信をなしたのはなぜか。今こうして、現実とは異なるらしい空間で相見えているのはどういった機序か。ヒントはあった。同じく双方向通信の実績があるのは、汪凱威ワンガイウエイと江藤博照の組み合わせのみ。

〈我々はともに、オルロフのなかに取り込まれている。だからこそ、助け合うことができる。同じ目的のために〉

汪は左手で己の面を剥ぎ取る。オルロフが汪の意図を過たず伝え、フィーもまた自らの顔に左手を添える。フィー自身の顔であったはずのその怪異の形相は、やはり面となって外れた。

ふたりは互いの面を交換する。

<私は君の、怒りの炎をもらう>

<僕はあなたの、自己肯定感をもらう>

<<そしてエトガルを取り戻す>>

## 十二

汪は単身、機兵のコックピットに座っている。太腿が狭苦しいのは、間違いなく、江藤の体に舞い戻った証拠である。そして鬱陶しいクラスタリングの電極の感触。

いつのまにか、龍王が X2 を抱きとめている。X2 の翼はいまだ強風と炎を撒き散らしているが、龍王の両手は離れない。

指先が熱い。

そう思ったが、現実のグリップはまだそれほどの高温ではない。汪は己の指でなく、龍王の指に異常があるのだと気づいた。格闘用にも使える鋭利な指先が、X2 の機体にめり込んでいる。その周囲は半ば溶け、半ば砕けたような具合であり、もはや龍王の腕は X2 と一体化し、離れようにも離れなくなっている。

ノイエーターの装甲と躯体を構成するニーベルンガイトを、龍王のエンドエフェクタから発せられたバルムンクフィールドが侵蝕している。量産機である龍にはなく、龍王にのみ備わる特殊な力。――オルロフに流れ込んできた幾多の思惟の統合の結果、汪はそれを理解している。

「私こそが切り札だ」

龍王のマニピュレータハンドが白く輝く。汪はそれを己の手のように動かせる。もはやシートの狭苦しさも、クラスタリングの感覚もない。視界はモニターではなく龍王の光学系により構成され、抱える X2 の重みすら感じ取れる。汪は龍王と同化していた。

X2 の背中に食い込んでいるオルロフの末端部分を溶断し、荒々しく引き剥がしていく。強く抵抗していた六枚の翼が、徐々に力を失っていくと、琥珀色の塊をほとんど背中から分離することができた。しかし、X2 の後頭部と繋がる接点だけが、まだ切れない。

<凱威。僕がやる>

X2 の腕が、覆いかぶさる翼を振り払い、首の後ろへ回る。接点に向けて機関砲を発射。しかし、破壊はかなわない。

「駄目だ。ニーベルンガイト化している。しかし、自由に動けるなら、フェリクス、立って背中を向けてくれ」

<わかった>

フェリクス・セラフィモフは己の意志で立つ。翼は役目を終えた花卉のように剥がれ落ちる。汪は自由になった両手で、再びオルロフに掴みかかる。左手でオルロフ本体を支えつつ、右手を手刀にして、接点めがけて振り上げる。

刹那、汪は胸にこみ上げるものを感じた。この一撃で、汪は己の肉体を取り戻し、フェリクスは戦いをやめることができる。ともにオルロフの軛から解き放たれる。

最大限の力を込める。

「唸れ電気死チョッパ！」

<おっと、そこまでだ>

汪の、龍王の手が止まる。機兵と一体化した感覚はさながらに、しかし金縛りのように、まったく自由にならない。

——体の持ち主が戻ってきた。壁の向こうとやらから。

汪は奥歯を噛みしめる。その奥歯が誰のものかはわからないままに。

<予想以上のはたらきだ、汪凱威>

今まで交信していたフィーとは全く感触の異なる思惟。赤の広場と同じ、江藤博照の思惟であるとわかる。呼びかけてもついで返信のなかった相手が、今、語りかけてきている。

<よもや俺の龍王恐怖症を、貴様の意識を介在させることで回避できるとは思わなかったぞ>

龍王をただ単に嫌って遠ざけていたわけではない、その事情を、汪は思い出す。稼働中の龍王に近づくだけで感じる、あの車酔いのような嫌悪感。それに乗り込んで己の神経を接続するなど、およそ考えられない。だからクラスタリングの個人調整すら拒否したのだ。

——なぜ、江藤博照の記憶を私が持っている。

汪は混乱した。オルロフのなかに塗り込められた自分が、オルロフの通信機能によって江藤博照の肉体とつながり、それを制御する。そんなことが本当に可能だったのか。もしやそうではなく、江藤博照が汪凱威の記憶や精神構造をオルロフを介して読み取って、エミュレートしていただけないのか。つまり、セルフメイドの多重人格。

——私は、誰だ。

本当の汪凱威はただのストレージとして機能しているだけで、もう生きた人間とは呼べない状態なのかもしれない。仮にそうだと、死んでいるのは今こうして思考している自分なのかというと、それではおかしいことになる。江藤博照のなかに生成されたコピー人格だとすればどうか。それはそれで、恐ろしい。これまでも今も、自身は肉体の主体でも精神の主体でもなく、オルロフとの通信を究め<崑崙>を支配するという野望すら、泡沫の夢に過ぎないということなのだから。モスクワの空に放り出されたときと同じ、圧倒的な孤独が汪凱威を自称する存在を苛む。

汪の意思を置き去りに、龍王は X2 の首元へと手を滑らせ、装甲を侵食しながら、コックピットをこじ開けはじめる。汪はフィーを凌辱しているような錯覚に襲われるが、自らの肉体同然に感じられる機体を、制御することができない。腹のなかに収まった江藤博照の肉体と精神とが、この体を支配している。フィーの思惟も感じるができない。気絶したのか、あるいは仮想人格に過ぎない汪が情報へのアクセス権を失ったのか。

<気をしっかりもって>

その一声が、肉体の感覚を失いつつある汪のもとへ届く。耳で聞いたという感触はないものの、夢の中のやりとりのように、意味だけはしっかり伝わってくる。いや、伝播されたのは意味だけではなかった。汪はそれが誰の発信であるかを確信した。

<エトガルくん>

汪は自身の声も音波としては感知していないことを意識しながら、しかしその応答がたしかに相手に届いたという手応えを感じている。機兵のコックピットシートで瞑目して思念を読み取ろうとするエトガル・ローゼンの鼓動を想起できる。――いや、実際にオルロフが伝えてくれているのかもしれない。汪にはそう思えた。

<そうです。あなたは汪凱威。江藤博照ではありません>

<VVに乗ったということか。どうやって？>

<ウルゼルのおかげです。――しかし、彼女だけの力ではなかったはず。おそらく、私を幽閉しVVを隠していた北熊の士官が、密かに、そのように仕向けたのでしょう>

<イルベチェフくんが……>

思えば、さきほど流れ込んできた思惟のなかに、イルベチェフらしきものがあつたような気がする。移りゆく戦局を、苦虫を噛む思いで見つめていた男がいたのだ。啓示軍と与してまで北熊の本懐を遂げることを、あの男は最後の最後で拒否した、ということだろう。

<汪大尉。フィーを救ってやってください。今それをできるのはあなただけだ>

エトガルもまた、“雲”により状況を感じている。汪はそれを理解した。

<しかし、体が言うことを聞かない。江藤に制御権を奪還されてしまった。この蛮人はX2の  
コックピットを破壊しようとしている>

折しも、龍王が宝物を漁る強盗のような手付きで、X2のコックピットを露出させつつある。紫龍隊などはうまく事が運んでいるとの認識らしく、傍観を続けている。

<それでも、あなたはオルロフの中にいる。この通信を成立せしめている端末の、文字通り、中に  
です>

汪は得心した。エトガルをいったん意識の外へ遮蔽し、かわって近辺のすべての人々――金星也、ドルグシキン、セルゲイ、ダーリヤ、その他同好会、紫龍隊、Su-44やバードデーモンのパイロット――を思い浮かべる。彼らの鼓動、視野、心境を。全世界思念送話装置<崑崙>の運用調整官には、それが可能だ。

<証明する必要がある。私が私であり、誰に操られるものでもないことを。私がエトガルくんらと  
仕上げたこのシステムの切り開く境地が、人類にとっての処女地であることを！>

あるはずのない龍王の肺と横隔膜を意識して、汪はあらんかぎりの力で叫びを上げる。

<誰か私を、龍王の暴走を止めてくれ！>

祈るように待つ時間は、長くなかった。

背中から槍で刺しぬかれたような痛みを汪は感じた。それは江藤博照の肉体ではなく、龍王の機体が受けた損傷と運動量の顕れだった。レーダーや相対バウムク反応といった機兵搭載センサの感覚を得た汪は、それが対空自走砲アルグンの放った砲弾だと理解する。

<バットウゲザ。それでこそテンガロンのしもべ……痛い！>

背中が続いて、脇、ふくらはぎに被弾。後者は貫通した。龍王<sup>ロンワン</sup>はとても立ってられない。そして汪<sup>ワン</sup>の感じる、体が萎えていくような感覚は、電源電圧の低下を示したものだろう。

策は成った。たとえ汪<sup>ワン</sup>が制御を奪い返せずとも、龍王<sup>ロンワン</sup>の動力と駆動系を壊してしまえば、江藤に好き勝手を許すことはない。

<見たか、江藤博照。これが智慧<sup>ちえ</sup>による戦いというものだ>

ただし、若干やりすぎた感<sup>ワン</sup>は否めないが、と汪<sup>ワン</sup>は胸中でひとりごちる。龍王<sup>ロンワン</sup>の機体ダメージが己の肉体ダメージのように感じられてしまうこの状態はそろそろ限界だった。思考に影響が出てしまう。クラスタリングのフィードバック機能をカットしたいが、こればかりはコックピット内の操作を要する。

——いや、まだ手段はある。

汪<sup>ワン</sup>は特別運用調整感として、亜細亜連邦軍の機兵の制御系についてもよく理解している。機兵を我が身のように感じ、操作もできるこのシステムは、パイロット、クラスタリング、そして頭部に搭載した主演算機の順に繋がって構成されている。つまり。

<ダーリヤ、どたまをぶち抜け！>

心得た、というダーリヤの声が聞こえたような気がした。しかし、アルグンはその任を果たせなかった。龍王<sup>ロンワン</sup>が膝を付きつつも振り向きざまに放ったロケット弾が、アルグンの砲塔を潰したのだ。

<ダーリヤ！>

<はっはっは。少しばかり気づくのが遅かったな。俺の勝ちだ>

<なにを、この死に体で>

<いかにも死に体だ。全くいいザマだ。面白くはあったが、やはり俺は龍王<sup>ロンワン</sup>を好かん。しかし、あれは役に立ちそうだ>

突如、汪<sup>ワン</sup>は便意に似た何かを感じる。尻ではなく腹に。江藤がコックピットハッチを強制開放している、とわかった。そして右腕が腹に添えられる。腹から臓腑<sup>イクスツヴァイ</sup>が漏れ出るような錯覚。龍王<sup>ロンワン</sup>の首は横たわる X2 に向けられている。

——まさか。

そこで汪<sup>ワン</sup>の意識は途絶えた。

### 十三

朝、汪凱威<sup>ワンガイウエイ</sup>がなにか気掛かりな夢から眼をさますと、自分が寝床の中で元通りの青年紳士に戻っているのを発見した。そしてもうひとつ、枕元に置かれた、よく熟れた赤い林檎<sup>りんご</sup>を。

手にとって見ると、それは本物の林檎ではない。色艶はよく再現されているが、石礫のように硬く、水平に分割線があり、一端に蝶番<sup>ちょうつがい</sup>がある。開けてみると、中はアクセサリーか何かをしまうようにできていた。丸めて留められた小さな手紙らしきものも入っているが、それは自分宛てではないような気がして、触れずに蓋を締めた。

汪<sup>ワン</sup>が寝ているのはどこかの病室である。見覚えはない。広めの個室で、二、三人掛けのソファも

置いてある。そこで横になって寝ているツルツル頭の男がいる。こちらはしっかり見覚えがある。夢にも何度となく現れたのだから。

「イルベチェフくん」

呼びかけた声に、新鮮さを覚える。自分がカネジュ・イルベチェフの名を呼ぶ声を、初めて聞いたような。

イルベチェフは速やかに覚醒した。

「やあ、おはよう」

そして左耳に手を添え何かを呟く。骨伝導式ヘッドセットで誰かに発信したようだった。

「その殺人的な硬さの林檎だが」イルベチェフは汪に言う。「きのう、アルバート通りの雑貨店が届けに来た。依頼主からの一通のメモを添えてね。君からフェリクスに渡してくれ、と」

「依頼主の名は？」

「エトガル」

汪の頭のなかでもやもやとしていた夢の記憶、そして夢でなかった記憶とが、その名を聞いた瞬間に峻別され、あるべき箱に収まった。

「フィーくんはどうなった。江藤少佐は。モスクワの支配者は」

「まあまあ、落ち着いてくれ。とりあえず事態のほうは先に落ち着いている。いろいろドンパチがあったが、ドルグシキン市長は『叛它龍』同好会を除く武装勢力をモスクワから追い出すことを宣言し、各勢力はおおむねそれを履行している。つまり、ここは今、事実上の緩衝地帯だ。中央議会の議員が何人か乗り込んできていて、彼らも交えて、今後の自治についての交渉が平和裡に進められている」

「さすがの野崎托塔か」

「会っていたのか？」

「——いや。それよりフィーくんは無事なのか。X2……、ノイエトーターに乗っていた子供だ」

「フェリクスは治療と検査の必要があったが、君より一足先に退院したよ。聞いた話では、母親の手伝いで忙しくしているようだ」

「母親……」

汪はフィーから親の話題を聞いたことがなかった。てっきり孤児かと思っていた。

「ダヴィーチェ・ドルグシキンさ。フェリクス・ドルグシキンが唯一の肉親と仲違いして家出し、啓示軍の宣伝活動に身を投じていることは、情報筋ではよく知られた話だった。細かい経緯を俺は調べていないし、興味もないが、入院中にドルグシキンが見舞いに来たことが効いたのか、すっかり和解したようだ」

自分を肯定する力。それは他者を許容する礎ともなる。オルロフの繋がりの中でフィーと交換し合ったものは幻ではなかったのだと、汪は思うことにした。

「オルロフはどうなった？ 江藤少佐は？」

「それは俺が聞きたいよ。龍王とノイエトーターが共倒れになった直後、江藤少佐はノイエトーターに乗り移り、そのまま機体ごと忽然と姿を消したそうだ。背中に取り憑いたオルロフとともに。君ならあの御仁がどこへ行ったかわかるかと期待をかければこそ、篁医師にかけあってこうして待たせてもらっていたが……。そういうことだ、神巖大尉」

いつの間にか、病室の入口に神巖が立っている。緩衝地帯に入るための偽装工作なのか、柄にもなく、『叛它龍』の人気キャラクターに扮している。

「汪大尉。金星也元帥からの指令を預かっています」

神巖はつかつかと立ち入ってくると、一枚の光磁気ディスクを汪に手渡した。ラベルはない。汪は神巖の顔を見上げる。

「概要をお伝えしましょう。汪大尉には、イルベチェフ大尉以下数名の特務部隊とともに、日本の関東へ戻って頂きます。準備はすでに進んでいますが、汪大尉の参加なくして進まない、クリティカルパスが存在しています。どうか速やかなる着手を」

何をしに、という愚問を汪は胸中に留める。報道も軍内部での情報共有も遮断されているが、横浜で生じた変事は、いまだ収束していないのだ。そして金星也は、汪凱威を対<崑崙>専門の運用調整官として認めた、信頼を置いた、ということだろう。

神巖は汪が心得たことを見て取ると、ゆっくりと頷き、イルベチェフにも会釈をして退出する。

汪は慎重にベッドから立ち上がる。イルベチェフが肩を貸そうとするのを断り、ゆっくりと、自分の力で。かなり鈍っているが、しかし紛うことなき自らの肉体である。江藤博照の肉体で過ごした日々もしっかりと記憶しているが、もはやオルロフの情報をインターセプトする生体素子としての力はない。江藤の肉体を預けられていた間には、自覚することがなかったが、今はそれが「無い」ことを認識できる。

おそらく、一方の江藤博照は、その力を持たない感覚を知らない。彼は生来の素質を授かった。汪や、そのほか大多数の人類が持ち合わせない素質を。

<真の敵は啓示軍ではない>

誰かの声が、あるいは誰のでもない声が、いまだ囁き続けている。